

昭和四十二年三月

造山第三号墳調査報告

鳥根県教育委員会

昭和四十二年三月

造山第三号墳調査報告

島根県教育委員会

## 目 次

一 調査に至つたいきさつ

二 調査の経過

三 位置と環境

四 墳 丘

五 内部構造

六 遺 物

七 結 語

### 図 版 目 次

第一 造山遠望・第三号墳全景	第六 南側第三・列石および西側列石
第二 空中から見た造山	第七 墳丘頂上面およびI・IIトレンチ発掘状況
第三 墳丘実測図	第八 墓壙と石室の蓋石 (一)
第四 墳丘東斜面および東側列石	第九 同 (二)
第五 南側第一列石および第二列石	第一〇 同 (三)

- 第一 石室実測図  
 第二 石室内部の状態  
 第三 遺物出土状態  
 第四 鉢出土状態・石室側壁  
 第五 排水構造(一)  
 第六 同(二)  
 第七 遺物(一)  
 鑑・土・師・器

挿 図 日 次

- 第一 墳丘断面区分圖 ..... 第十八 遺物(一)  
 第二 造山古墳の環境 ..... 第十九 同 鏡細部(II)  
 第三 四列石実測図 ..... 第二十 同 玉類(IV)  
 第四 墳丘土層実測図 ..... 第二十一 山陰の古式堅穴式石室  
 第五 墓域実測図 .....  
 第六 石室蓋石粘土被覆状態実測図 .....  
 第七 石室蓋石実測図 .....  
 第八 石室上面実測図 .....  
 第九 石室外部東側排水溝断面実測図 .....  
 第十 石室外部南側排水溝実測図 .....  
 第十一 南側第一列石附近の排水溝実測図

- 第一図 墳丘断面区分圖 ..... 五  
 第二図 造山古墳の環境 ..... 一〇  
 第三図 四列石実測図 ..... 一五  
 第四図 墳丘土層実測図 ..... 一五  
 第五図 墓域実測図 ..... 一九  
 第六図 石室蓋石粘土被覆状態実測図 ..... 一〇  
 第七図 石室蓋石実測図 ..... 一〇  
 第八図 石室上面実測図 ..... 一〇  
 第九図 石室外部東側排水溝断面実測図 ..... 一一  
 第十図 石室外部南側排水溝実測図 ..... 一一  
 第十一図 南側第一列石附近の排水溝実測図

第一二圖 石室內遺物出土狀態	一四
第一三圖 土師器型式圖	一五
第一四圖 土師器參考圖	一六
第一五圖 鏽斷面測量圖	一七
第一六圖 管玉実測圖	一七
第一七圖 鐵器実測圖	一九

## 凡例

- 一 この報告は、島根県教育委員会が安来市教育委員会との共催で、昭和四十年七月、八月に行なった安来市荒島町道山第三号墳の発掘調査に關するものである。
- 二 発掘調査は、山本清・井上翼介・岩佐文子・島重海・池田潤雄・近藤正・門脇俊彦・遠岡法障・糸賀達典・川井昭道・田中信道・勝部康雄・内田才・住田正男・松本興・二島育子・永田由美子が調査員としてその任にあたり、島根大学、安来高校、松江北高校、松江南高校・松江工業高校、安来第三中学校等の学生生徒、その他諸方面の参加協力により実施した。
- 三 この報告書の執筆は山本が担当した。
- 四 遺物の整理と実測は近藤が主となつて行なつた。
- 五 実測図の作成はすべて近藤が担当した。
- 六 写真撮影は山本が担当した。

## 一 発掘に至つたいきさつ

造山第二号墳の存在が判明したのは昭和三七年晚秋のことであった。造山第一号墳は早くその第一号石室が発掘され、鏡・管玉・刀などが出土して注目され、昭和二年一二月一六日附で国の史跡に指定されたのであるが、その後同じ坦丘で第二号石室が発掘されて、廣く注意されるようになった。それは相当大きな古墳でありまた種々な遺物が出土したということばかりでなく、石室は二つとも典型的な細長い要穴式石室といふ古式の特徴をもつものであり、かつまたその墳丘が方形墳であるという点で重要な視されるようになつたのである。しかしながらこの第一号墳と強統きの近い位置に並んでいる第二号墳と第三号墳の存在は一向に知られていなかった。ところが鳥根県教育委員会は「鳥根の文化財」第三集を編纂し、それに造山一号墳の写真とともに墳丘実測図を掲載することとなつたので、昭和三七年の秋数日を費してその測量をなした。その際附近を踏査して第二号墳の存在が判明し、また測量のためトランシットをすえようとして第三号墳が判明したのである。第三号墳は前方後方墳であり、第二号墳は方形を呈していることがわかり、第一号墳が方形であることとあわせて、二者とも方形の特徴をもつものであり、いずれも相当の大きい古墳でそれが相並んで尾根統きに営まれていることは、たがいに密接な関係のある古墳と思われ、すでに知られていた第一号墳が注目に値する古墳であったが、ここに一擇の古墳として一層その重要性を加えることとなつた。

鳥根県教育委員会では、行政上の立場から昭和三六年度から県下の遺跡について年次計画を以て組織的な発掘調査を行なつてきたのであって、すでに三六年度に松江市の薄井原古墳、三七年度には飯石郡三刀屋町の松本古墳、三八年度において出雲市妙蓮寺山古墳の調査を実施したのであった。これに続いて調査を実施するについては、古式古墳の多い安来地区が適当と考えられ、この造山第三号墳を調査することとしたのである。調査の対象たる遺跡は、所要経費や調査日数等の割約もあることとて、あまり規模の大きなものは避けねばならないが、すくなくとも調査によって、県下の当代文化を解明する上有力な発掘所となるような成果の得られることが望ましいのであるから、古墳を発掘する場合ある程度の規模をもつものであることも必要と考えられた。その結果、二号墳はかなり条件をみたるものである。また造山の古墳群は、その中の第一号墳の内容が判明していく、当地方の当代文化を考える上には極めて重要な発掘所となつてはいるけれども、学術的な発掘を行なつたものでのないで、種々不明な点が少なくない。それゆえ、同じ一連の古墳群中の第三号墳が明らかにされるならば、それによつて第一号墳の知見を補うことも考えられ、また第一号墳と相まって、県下の古墳文化を解明する上には有益な知見の得られることも期待されたのである。

まづ昭和二九年六月二十日、島根県文化財専門委員会本清、県教育委員会社会教育課文化財係長井上頼介、安来市教育委員会教育次長河藤顕正、安来市文化財専門委員内田才の四名で第三号墳を予察のために踏査し、略測図を作り、発掘調査についての諸般の条件を検討した。然るところ、二九年の夏には県下は未有の台風禍に見舞われたため、同年度の調査は翌年に繰り越すこととなり、昭和四〇年の夏にこれを実施するにいたつたのである。

## 二 調 査 の 経 過

発掘調査を行なうために左記のように調査団を編成した。

### 調 査 団

团长 島根大学助教授 山本 清	团员 県立平田高等学校教頭 井上 相介
團員 県立松江工業高等學校教諭 岩佐文子	県立松江南高等學校教諭 池田満雄
瑞穂町立高原中學校教諭 内田 才	島根県立博物館学芸員 近藤 正
安来市文化財保護委員 木 田 兴	安来市文化財保護委員 住田 正男
県立安来高等学校教諭 川井 田道	県立松江北高等学校教諭 島 重海
大田市立志学中學校教諭 連岡 法暉	県立安来高等学校教諭 田中 信道
安来市立第三中學校教諭 勝部 康雄	山陰市立第二中學校教諭 糸賀 達典
仁多町立阿門小學校教諭 水口 由美子	柿木村立柿木中學校教諭 三島 育子
事務局 島根縣教育委員会 社会教育課文化財係長 石塚 尊俊	安来市教育委員会 教育次長 井上 頼正
主事 長谷川 清	主事 池田 電治
タ 市川 博史	
タ 加島根大学学生	
タ 松江南高校生徒	
タ 安来高校生徒	
タ 松江工業高校生徒	
タ 安来第三中學校生徒	

月 日	底務										任務分担				
	7月 28	29	30	31	8月 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
山本															
井上															
岩佐															
島															
池田															
近藤															
内田															
川井															
田中															
蓮岡															
糸質															
門脇															
勝部															
三島															
永田															
石塚															
長谷川															
良谷川															
島大	5	6	4	5	5	4	4	4	4	5	4	4	4	5	6
松江北高	16	4	3			3	18	6							
松江南高						4	3	1	1						
松江工高	6	6	6	5		6	6	6	6						
安来高	3	10	4	7		12	8	17	23						
安来三中	10	13	10	9											
(安来一中)						10	9								
(東出雲中)						1	1	1	1						
(出雲工高)									1						

調査団員参加状況表

記録、生徒指導 井上、岩佐  
資材管理 全員  
発掘調査

(島大学生は勝部昭、佐藤悦子、石井悠、長谷川徳四郎、今岡稔、勝部築、押藤律雄、福田昭)

以上の構成により、地元安来市以外の団員は原則として安来市荒島公民館に合宿して調査を行なうこととした。調査は七月二八日には開始し、七月中には草木の刈り取り墳形測量等を主とし、八月一日以降主要部の発掘を開始することとし、八月一〇日まで連続して調査を行ない、主要部の埋め戻し作業も一応完了した。この間調査団員の参加状況は上の通りである。

調査の方針として、経費・予定日数を考慮して、墳形ならびに須丘丘陵成の様式および墳丘の施設に関してはその要点をいたしかめ、内部構造および副葬品の詳細を明らかにす

連絡渉外、給食  
人夫管理、同食支給  
会計  
発掘指揮、成果発表

県教委 石塚係長、同 長谷川主事  
安来市教委 同職次長、池田主事  
県教委、市教委分担

調査  
山本

ることを目標とした。そこで発掘作業の力点をできるだけ中央部におくこととし、まず方形の墳丘の北邊に平行し墳丘の中央部を通過して、丘の大部を東西に横断する幅一・五メートルの第Iトレンチを設定し、これを基幹として調査を広げることとした。第Iトレンチの墳頂部を中心とする長さ一五メートルの範囲を五メートルずつに三分し、西方からI<sub>1</sub>・I<sub>2</sub>・I<sub>3</sub>の三区とし、I<sub>1</sub>から西方へ延長した部分をI<sub>1</sub>・I<sub>E2</sub>とよぶこととした。

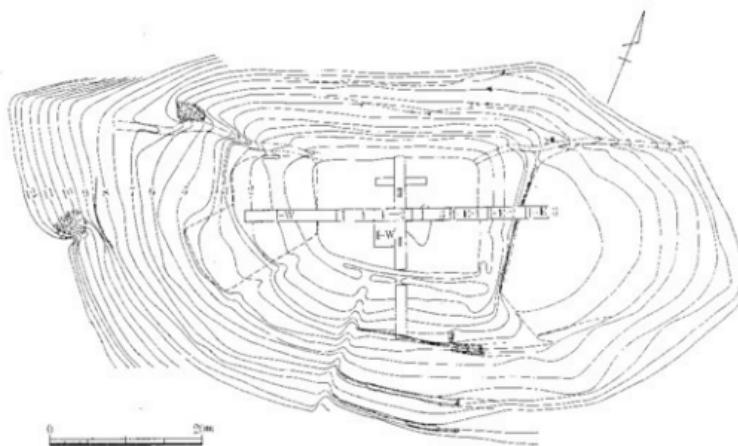
まずI<sub>1</sub>・I<sub>2</sub>・I<sub>3</sub>を中间に壁を残して掘り下げ、I<sub>3</sub>において深さ約三五センチに達したとき墓塚の東壁の上縁を検出し、次にI<sub>2</sub>とI<sub>1</sub>との界のあたりに墓塚の西壁の上縁を検出した。さらにI<sub>2</sub>を深さ約七〇センチまで掘り下げて蓋石の一部を発見した。そこでI<sub>1</sub>に直角に幅一・五メートルのトレンチ（I<sub>1</sub>の東端から一メートルを東の側線とした）を南方に設定しこれをIIトレンチとよび、同様に北方に設定したトレンチをIIIトレンチとよぶこととした。IIトレンチにおいて石室蓋石列の上を覆う粘土を検出し、彫穴式石室であることが推定されるにいたったので、IIを西方に拡張してまず蓋石被覆の粘土を全面的に露山させ、さらに西方へトレンチを拡張して蓋石のはば全形を露呈させた。この間に、石室の中央部からその東の方にかけての埋め土層に土器器の小片が多数検出された。以上の作業と平行して、IIIトレンチの発掘により墓塚の北壁の上縁を検出し、トレンチを拡張して墓塚北部も完全に露呈させた。

このようにして、まず中央の土体構造に関する墓塚の全容と六枚の石室蓋石の上面を完全に露呈させ、南と北と両端の蓋石はそれぞれそのままとし中央部の蓋石四枚を撤去した。石室の底には若干の封土が流入していくけれども、石室中央部の床面に僅かに傾斜して遺存した鏡は、埋没することなくそのままの上向を露出している程度であった。石室の側壁は、極一部にやや崩んで内側へはみ出した石もあつたけれども土体として確実に原形を保っていた。それ故容易に出土を排除して遺物と床面の細部を調査することができた。

墓塚および石室は、墳丘の現形における上面からすれば中央よりもかなり南に偏しており、墓塚よりも北にかなり広い面積を残しているのでIIIトレンチに直交するIII-W・IIIトレンチを設定して検討したが、耕土の下はすべて地山で、埋葬構造は認められなかつた。

なおI<sub>1</sub>・I<sub>2</sub>・I<sub>3</sub>の各トレンチにより土層を調べ墳丘の築成について検討したが、耕土の下はすべて地山であることが判明した。

次に、石室の底の礫床を除いたところ、室の中央を縱断する排水溝が検出され、また東壁の柱積の外側の埋土を除いたところ、そこにも柱積の縁辺に沿うた排水溝があらわれ、一方石室南端の外側を発掘し、そこに東西両側の柱積の外を通った排水溝と室底から通ずる排水溝との二者が合流して一本の暗渠となり、墳丘南斜面の下を下降する構造があらわされた。そこで、墳丘の南斜面の第一列石の上・下両側を発掘し、井の暗渠がここまで下降しており、さらに下方へ通じている状態が明らかとなつた。



第1図 墓丘調査区分図

墳丘斜面には石垣状の列石が認められるので、ごみや若干の土を取り除いて明瞭にする程度で特別に発掘は行なわなかった。調査日数を考慮せねばならなかつたからである。

日をおうての調査の進行状況はおよそ次のようであつた。

七月二八日（水曜）晴一時頃

器財・宿泊用荷物などを自動車に積み、石塚・長谷川・近藤・山本が同乗し、九時半鳥根大学を出発、一〇時荒島公民館に到着。一時から古墳の現地において結觸式および修復式を行なう。県教委社会教育課長補佐尼ヶ崎正義、文化財係長石塚尊俊、土事長谷川清、安来市長杉原寛一郎、安来市教委次長門脇頭正、文化財係中川博史、調査委員とともに参列。午後から作業開始。

① 墓丘上面から始めて草刈。

② 墓形測量。二〇〇分の一で五〇センチごとに各高線を描くこととし、最高所を零とし一メートルの線を約半周まで描く。

七月二九日（木）晴

① 墓丘伐採——周囲の平地までとくにひどいものを切除。

② 墓丘測量——一メートル線まで。

③ 列石露呈——東側第一列石。

④ レンチ設定。

七月二一〇日（金）晴

午後晴

⑤ 墓丘測量——三メートル線全周。東側と南側は四メートル線まで。

⑥ 列石露呈——東側および南側。

⑦ 第一レンチ——全面表面を削り京根を除く。

$I_1$ ・ $I_2$ ・ $I_3$ ・ $I_E$ は南半を、 $I_{E2}$ は北半を、薪土深さ約四〇センチ内外を撤去。

七月三一日（土）快晴

- ① 墳丘測量——東側四・五メートルまで、南側八・五メートルまで。

- ② 列石露呈——東側。なお南側には第二、第三の列石あること判明。

- ③  $I_1$ トレンチ—— $I_3$ において墓壙東壁上縁横山（深さ地表下約三・五センチ）。 $I_1$ と $I_2$ との界のあたりに西壁上縁を検出（深さ約四〇センチ）。

$I_2$ において蓋石の一部を検出（深さ約七〇センチ）。

八月一日（日）快晴

- ① 墳丘測量——東と南の下部。

- ②  $II$ トレンチ—— $I_2$ の南に幅一・五メートル、長さ五メートルの $II$ トレンチを設ける。

- ③  $I_2$ に出ている蓋石の深さまで掘り下げる。西半に粘土被覆あらわれる。南端に遊離した石あり。

- ④  $III$ トレンチ—— $I_3$ の北方へ幅一・五メートル、長さ四メートルの $III$ トレンチを設定。墓壙北壁を検出。

- ⑤ トレンチ七層実測—— $I_2$ 北・南壁。 $I_3$ 北・南壁。 $I_E$ の北・南壁。

八月二日（月）暴時々晴

- ① 墳形測量——西側下部。

- ②  $II$ トレンチ——西側へ $I_2$ の西端まで拡張し $II^W$ と称する。墓壙西壁に沿うて上部の土を拂除。蓋石の上方と思われるあたりに土師器の破片散乱。

- ③ トレンチ土層実測—— $II$ 、 $III$ の東西壁。

八月三日（火）晴

- ① 墳形測量——西側下部の残り。北側六メートルまで。

- ②  $II$ トレンチ——南へ延長拂土。

- $II^W$ ——墓壙の西壁露呈。

- ③ I<sub>3</sub> —— 蓼塙の北壁露呈、途中まで。  
 ④ 本日から現地に不覺番をおく。島大生石井・今岡・勝部。  
 八月四日（水）晴  
 ① 墳形測量——北側六・五メートルまで。  
 西南側八・五メートルまで。  
 ② II・W —— 粘土被覆実測。  
 II<sub>E</sub> —— II<sub>E</sub> の東方へ拡張し II<sub>E</sub> とよな。蓼塙東部に当る部分上部排土。  
 ③ I<sub>3</sub> —— 南壁土層因補正。  
 ④ 東側列石 —— 実測。  
 ⑤ 不覺番 —— 通間・今岡・勝部。  
 ⑥ 本日より鳥取県立科学博物館集井照人氏參加。また松江兩橋校杉原氏加勢。

八月五日（木） 晴 甚だ暑し。  
 八月五日（木） 晴 今岡・勝部。

- ① 墳形測量——東北隅下部。  
 ② II<sub>W</sub> 区 —— 石室蓋石清掃実測（粘土被覆状態。蓋石）。  
 ③ II<sub>E</sub> 区 —— 蓼塙東壁探査。埋土大部分元了。  
 ④ 不覺番 —— 石井・今岡・勝部。  
 八月六日（金） 晴風強し（台風一五号）  
 ① 墓塙 —— 南壁を露呈。境内の埋土を蓋石の下面の高さまで拂除し、蓼塙の全形を的確にし、清掃して撮影。  
 ② 石室 —— 蓋石周囲の石を補足実測し、チニーンブロックにて蓋石の撤去（南端と北端の蓋石は残しておく）。  
 ③ 不覺番 —— 石井・今岡・勝部。

本日台風九州より山口県を通過し隠岐附近を抜けるという。正年前から烈風となり雨をもよおす。昼食後の休憩を施して作業を進め、四時



調査の状況 1  
蓋石の実測

じる心配された蓋石撤去を終ったので、石室上にテントを張り排水処置を講じて人夫の作業を打切り、調査員のみ残って室内を試掘し明日にそなえる。

八月七日（土） 晴

- ① 石室——内部発掘。室外排水溝（南側）発掘。外側扣積の石を実測。  
 ② W——地山まで発掘。  
 ③ I E2 —— 実測。

八月八日（日） 快晴

- ④ 不發番——廻回・糸貫。

八月八日（日） 快晴

- ⑤ 石室——内部発掘完了。撮影。遺物採取。

⑥ 南排水溝——石室の南接部と第一列石附近を発掘。

⑦ 列石——南側の列石清掃。南第一列石、第二列石実測。

⑧ I w I E —— 実測。

⑨ I w I E —— 実測。

⑩ I w I E —— 実測。

⑪ 不發番——門邊・石井・今岡。

本日西川宏氏来会加勢。

八月九日（月） 曇後晴

⑫ 石室——内部再検討。実測。外部横断面検討、外側排水溝検出（東側）。

⑬ 南方（中央）排水溝——末端を検討。第一列石の下を通つて下方に向かうこと判明。

⑭ III E W —— いずれも耕土の下は地山であつて主体構造は存しないこと判明。

八月一〇日（火） 曇

- ⑮ 石室——実測。



調査の状況 2  
蓋石撤去作業

- ④ 南排水溝：実測。
- ⑤ 沖草——水田から墳頂までの高さ（四二・一メートル）。第一号墳との距離（一二七・八メートル）。
- ⑥ 磐石復原。埋戻し作業。

八月一日（水）雲

磐財等を運搬し、各自帰宅。

以上のようにして、ほぼ予定日数の間に調査を終了し、古墳についての基本的な事項については一応これを明らかにすることができた。

### 三位位置と環境

遺山第三号墳の所在地籍は、島根県安来市荒島町字遺山三〇・七三番地（山林、金山久雄所有地）およびその隣接地若干である。荒島の町の北方にあたり標高六〇メートル余の丘陵があるが、この丘陵の頂上部から西方にかけて三基から成る遺山古墳群が営まれている。右の丘陵頂上部から西方丘陵の端が長くのびて水田の中へ半島状に突出している。（図版第一一二）

第三号墳はこの丘陵先端部頂上にあり、周囲の水田からの比高四一メートルばかりの高さをもつていて、第三号墳の東北万坂部をへだてて約一二〇メートルばかりの所に第一号墳があり、第三号墳よりも一〇メートルばかり高い位置を占めている。この第一号墳の東方一〇〇メートルばかりの所は、標高六〇メートルばかりの丘陵で、そこに第二号墳がある。

第一号墳（E-1）は廻廊およそ六七〇メートル、面積約三〇メートルの方形墳であつて、墳頂に二つの堅穴式石室がある。墳丘には数段に石垣状の列石をめぐらしている。また墳丘上部から検出された土器片は埴輪と考えられていたが、古式土師器の蓋に見られる口縁部（断面が5の字形を呈するもので、三重口縁などともよばれるもの）をもたらすによる羽状の刺突文様をもつて一種の円筒形とも思われるものである。一つの堅穴式石室のうち、早く発掘された第一号石室は、幅約一メートル、高さ約一メートル、長さ約七メートルあり、扁平な割合を小口積みにした典型的な古式の堅穴式石室であるが、断面がU字形にくぼむ床面は砾を敷き、その下に割石の排水溝を設けたものである。方格規矩鏡一面、二神二獸獸帶鏡一面のはか、ガラス製管玉（太形）、鉄刀等が出土した。第二号石室は第一号よりやや小形ながら、ほぼ同様の石室で、床面は砂を用いたものであった。方格規矩鏡一面、碧玉製紡錘車一、ガラス管玉（細形）、刀劍身などが出土した。これら出土品は東京国立博物館に収蔵され

ている。

第二号墳はまだ実測されていないので、正確なことはわからないが、西南方向きの長さ五〇メートルばかりの前方後方墳と思われるものであつて、円筒埴輪が認められる。さて造山古墳群のある位置（第2図）は、伯太川と飯梨川の下流域の冲積平野の西北隅にあたっているが、この平野の周縁にある丘陵は、多



第2図 造山古墳の環境

- |             |          |       |          |      |
|-------------|----------|-------|----------|------|
| 1 造山        | 2 大成     | 3 松山  | 4 塩岸方墳   | 6 若原 |
| 7 塩岸神社前     | 10 西赤江宮山 | 15 岩舟 | 17 鰐湯病院跡 |      |
| 18 西かわらけ谷横穴 | 21 棚谷    | 22 宮谷 | 23 矢田古墳群 |      |
| 24 能義神社丘陵   | 35 篠尾    | 38 小谷 |          |      |

くの注意すべき古墳を含んでいる。この平野の北部——中海海岸には、近世にできた新田も相当にあり、元来飯梨川や伯太川は相当の砂を流す川であることによるのであるが、しかし山雲の西部にある斐伊川にくらべると、洪水の害はそれほど甚だしかったとはいえない。東西約六キロ、南北六キロばかりのこの安来の平野は、西方の斐伊川、神吉川流域にある鏡川平野にくらべると小規模ではあるが、出雲では第一のまとまつた水田地帯であり、しかも比較的安定した水田地帯であることが注目される。古式の古墳は、西の鏡川平野には少なく、この安来平野の縁辺に多いのであって、それは右のような比較的安定した水田地帯であることを説するのであろう。そこで、造山古墳の附近、安来平野の西部方面の古墳を挙げてみると次のようである。(番号は第2図に示すものと同じ)

### 1 造山古墳群

2 大成古墳(番号)——安来市荒島町。丘陵上に営んだ底辺二六・五メートル、頂辺約二二・五メートルの方墳であつて、扁平な剥石を小口積みにした細長い要穴式石室を主体とし、船載の二神二獸鏡、鐵製素頭頭大刀一、刀身二、土師器の小形丸底壺二等を出し、古式の方墳として早くから注目されたものである。

3 仏山古墳——荒島町。丘上にあり円墳と思われるもので、石垣状の列石があり埴輪円筒も認められる。やや大きな空間をもつ一種の箱式棺を主体とし、鉄地金銅張納骨状の吉葉、猶輪式の環頭、斧頭、櫛残欠等が出土した。今は墳丘の大半を失い、遺物は東京国立博物館に収蔵されている。

### 4 塩津山方墳——久白町。

丘上に営んだ底辺約四〇メートル、高さ約三メートルの方墳で、蓋石らしいものも認められる。

### 5 塩津山古墳群——久白町。

丘陵の尾根筋に小形の円墳が二基ばかりある。

### 6 若塚古墳(番号)——久白町。

丘陵上の小形の円墳である。石棺式石室を主体とする。玄室は四注式妻入りの引抜きの家形柱状のものに横口を設けたもので小形ながら入念に加工され、中にあたかもまな板のよくな形の脚石をもつ石床がある。蓋石は割石を用い、半埋している。

7 塩津神社前古墳(番号)——久白町の塩津神社前の道ばたにある。丘陵の古墳で、今は封土を失い石室が完全に露出しているが、墳丘の残存部からは埴輪の円筒片が発見される。主体は石棺式石室で、玄室面のみ遺存する。砾灰岩の切石四枚で四壁と底を構成し、蓋石は外面も四注式家形に削った立派なものである。石棺式石室としては、大きさ構造ともに典型的なものである。

8 山ノ神古墳——久白町。丘陵にあり、円墳と思われる。直径約三〇メートル、高さ約二メートルの墳丘で、石室の蓋石が露出し、上に小祠を祀る。ここから出土たという土器の破片と直刀の残欠を荒島小学校に保管する。

- 9 高塚山古墳——荒島町。山の頂上にあり、墳形は破壊されて不明。荒島石の切石を用いた石室の基部を遺存する。石箱式石室と思われる。室の内法幅約二メートル、長さ約二・七メートルあり、石材の厚さ約二〇センチである。
- 10 西赤江宮山古墳——赤江町。元「神塚古墳」と呼ばれた。独立丘陵頂上に営んだ前方後方墳で、長さ約六〇メートルのものであったが今は中学校の建設により消滅した。墳丘には埴輪の円筒を用い、象形埴輪（器財）も検出された。墳丘の周囲には列石をめぐらすものである。地山を削削して墳丘の基底部を形成し、その上に大量の盛土を施したもので、盛土の深さは深い所では四メートルに及んでいたが、もとはさらに一メートル以上の高さがあったものと推定される。玉宗殿としたため墳丘上面も甚だしく削られていて、内部構造はすでに失なわれていた。墳形、築成の様式、封土から発見された上部器類等諸種の点から古墳時代中期の中ごろ乃至後半期のものと考えられる（庄）。
- 11 仲仙寺古墳——西赤江町、仲仙寺脇の丘陵上にあり、径一六メートル、高さ約二メートルの円墳で、主体は切石を用いた一種の箱式棺であるが、蓋には両側に一つずつ突起をそなえたものである。
- 12 深迫古墳——西赤江町。丘上にあり、墳丘はほとんど破壊されているが、小形の円墳であったと思われる。人物埴輪の残欠が山上している。
- 13 武巒山横穴——西赤江町。二穴あり、須恵器等出土。
- 14 中津八幡山古墳群——中津町。円墳、横穴。
- 15 岩舟古墳——岩舟町。低い丘陵部にあり封土を失う。堅った石組式石室である。前室は床石を残して破壊されてなくなっているが、奥室には特殊な家形石棺をおくものである。昭和二二年一二月、八日附で史跡に指定されている（庄）。
- 16 植田宵山古墳群——円墳と横穴である。
- 17 鹿ノ湯病院跡横穴——植田町。横穴の中に組合わせの家形石棺一基を遺したもので、今は穴は半埋し、石棺は飯製小学校に移されている。遺物は東北大考古学研究室の所蔵となっている。小形彷彿鏡、こはく兼玉、太形中空金銅鏡、金銅冠立鏡、銀被覆の鞘をもつ單龍冠式の優秀な環頭大刀。その他金銅装等の刀數口の残欠、直弧文を刻した小形の鹿角葵刀子、鞍金具、辻金具の残欠等極めて優秀な副葬品であつて、横穴としては注目すべきものである（庄）。
- 18 西かわらけ谷横穴群——植田町。一六穴あり、中の一穴からは、金環二、玉類、環頭大刀が出土した。環頭大刀は双龍環式で保存甚だ良好であり、鞘から抜くことができ、今は奥大津市の細見良の所蔵となり、重要文化財に指定され、身は研ぎ上げられている。

- 19 東かわらけ谷横穴群——植田町。
- 20 かわらけ谷横穴群——植田町。
- 21 植谷古墳——矢田町。丘上にあり、扁平削石小口積長さ四・三メートル、幅一メートル、高さ九〇センチの堅穴式石室があり、鐵鎌、土器片が採集されていて、古式様相として注意される。
- 22 宮谷古墳——矢田町。丘陵上にあり、前方後方墳であることが注意される。
- 23 矢田横穴群——丘陵の尾根には、土師器破壊(はき)、地山を僅かに加工して盛土を施した古墳があり、丘腰には数十の横穴がある。横穴には家形石棺を藏するもの四穴あり、石棺の極めて整備なものもあって注意すべき横穴群である(図9)。
- 24 能義神社丘陵古墳群——能義町。能義神社奥ノ院古墳と称する二重に深めぐらす円墳(外徑五五メートル、内徑三九メートル)、上ノ谷古墳と称する径一六メートル、高さ一・五メートルの円墳に家形石棺の蓋に似た四個の突起のある蓋をもつ一種の箱式棺を主体とし玉類等の出土の伝えられる古墳、その他小円墳群等を含んでいる。
- 25 祝詔横穴群——敷牛町。
- 26 長江山横穴群——タ
- 27 大平横穴——タ
- 28 飯生八幡宮山横穴群——タ
- 29 意多岐神社古墳群——タ
- 30 宮谷横穴群——タ
- 31 築山横穴——タ
- 32 西宮谷横穴群——利弘町。
- 33 古寺谷横穴群——タ
- 34 天神山古墳・天神山横穴——沢町。前者は僅約二五メートルの円墳であるが、丘上にあり、頂上面に地山面があらわれ盛土少なく、埴輪をめぐらしたもので、古式の様相を呈するものとして注意される。
- 35 鶴尾土壙墓群——丘陵頂上に土壙墓の群集するもので、昭和二七〇三年八年に山本が調査した。初期の土師器が多量に検出され、山陰の土

墳墓群として注意すべきものである(215)。

36 社日山古墳——折坂町。方墳である。

37 奥田山横穴群——

38 小谷土塚墓——切川町。丘上にあり、昭和三九と四〇年に近藤正によつて測定された。土塚の中に組合木棺を仕組んだもので、上古初期の仿製鏡と考えられる内行花文鏡や刀子・鎧が塚内から検出され、また墓上に供獻された土師器類は土師器の初期に近いものである(214)。

39 加茂舟形棺・同箱式棺——加茂町。丘上にあり、古式の様相を呈することが注意される。

40 谷二谷横穴——加茂町。

41 鉢島山横穴——

42 赤崎横穴群——赤輪町。

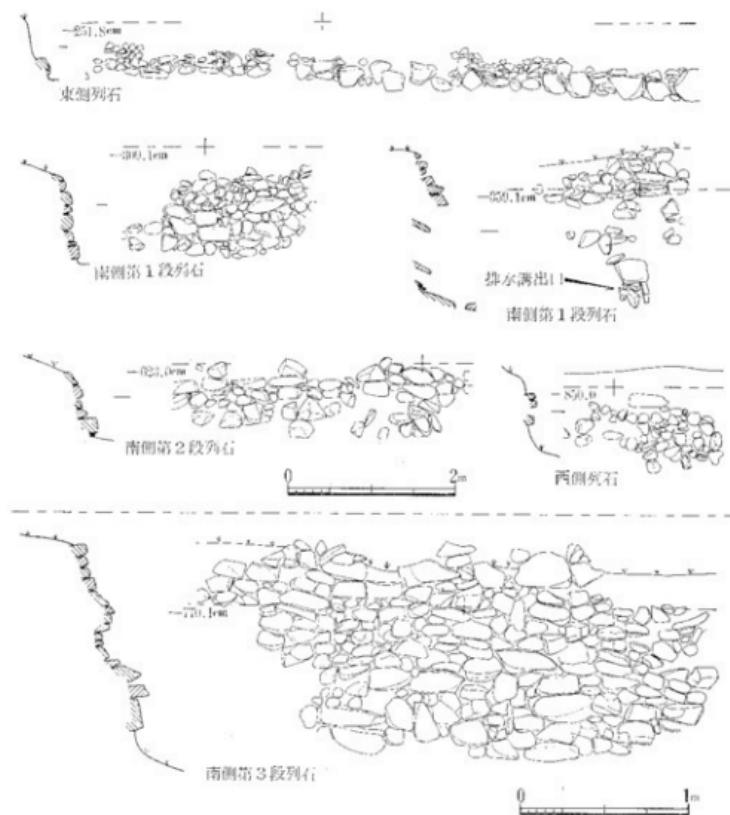
43 大荒神横穴群——月坂町。

44 中尾奥横穴·日坂露横穴——

以上は安来平野西部における古墳の大体の姿を示すためにあげたのであるが、未調査の区域もあつて(たとえば田嶺山の麓方面等)この平野の縁辺の丘陵には、いたる所に古墳が分布しているといつてよい。その中にあって古式の様相のものも少なくないが、規模の大きなものは、遺山古墳群が代表的であり、またその附近に西赤江宮山古墳や埴津方墳、大成古墳など比較的大きなものが集つていることも注意される。安来平野の西部では、後期古墳には墳丘の顯著なものは殆んどなく、この点篠川平野方面と極めて対照的であるが、小規模でも石棺式石室の堅美なものや、横穴でも石棺をもつものの、優秀な副葬品の出土したものがいくつもあることが注意される。ともかくも、造山およびその附近の地域は、山雲国中でも、もつとも古い様相の古墳としては大形のものが集中しているように見受けられることが注目されるべきであろう。

## 四 墳 丘

墳丘は一種の方形墳であつて、そこに石垣状の列石をそなえたものである(図版第三)。列石を日安としてその広さをいうならば、少なくとも東西約五八メートル、南北四四メートルばかりを墓域として加工し施設をなしたものである。頂上部と東西の両斜面および両斜面の西部等



第3圖 列 石 寶 潤 圖

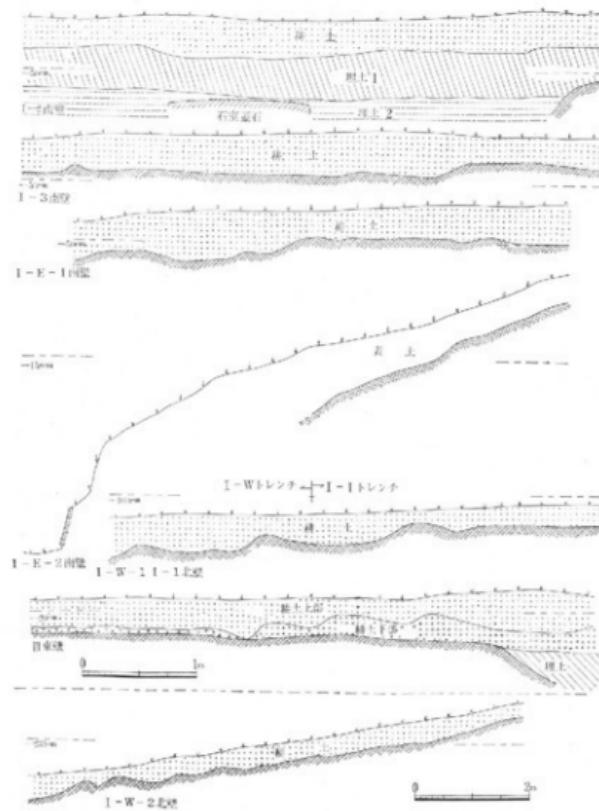
は、畑や孟宗竹として開墾されたため、かなり原形を損じたものと思われるが、一応現況について記すこととする。頂上面は、東西二二と二三メートル、南北一五と一六メートルのほぼ長方形の平面をなしている。この頂上面のうち、大体に元の姿を保っていると思われるのは北の一边と東の一边であるが、それはたがいには直角をなしている。なお西側でも最高所から五〇センチの等高線も北の辺には直角をなしている。頂上面の西部の南側は隅角部が北の方へ寄って西の辺は短くなっているのは、このあたりが孟宗竹の藪になつておらず、客土などのため削られたためと思われる。

次に斜面の状態を見る。まず北側斜面はかなり急斜面をなすが、頂上から三・五と五メートルのあたりに緩傾斜の部分があり、点々と頭ほどのが認められるので、三・五と四メートルのあたりが墳丘のすそにあたり、そのまわりに丁度縁のように平地がめぐつていてものようである。次に東側では頂上から三メートルばかりの所にすそがあり、すそから外は広い平地となつていている。件のすそには、直線に石畠状に石を積み並べている状態が約一九メートルにわたって遺存する（図版第四および第3圖）。その高さは、現在では一メートルに達しない低いものであるが五〇と二〇センチの割石を用いた堅然としたものである。元は今少し高く積まれていたのである。この列石についてやや疑問であることは、列石の方向は頂上面の長方形の東の辺と正しく平行しないこと、東南の隅角部のすそは列石の縁を越えて東へはみ出していることである。列石の縁が頂上面の一边と平行しないのは墳丘築成に際し企画が精緻でなかつたためとも考えられる。隅角部がはみ出しているのは、この部分の切削整形工事が完了しなかつたためか、あるいは後に何らかの事情で頂上部の土がこの所へ持ち出されたためかとも思われるが、発掘して土層を調べなかつたので確実な判定はできない。

次に南の斜面について見ると、頂上から三・五メートル余り下つたところに高さ一・一メートルばかりの第一列石があり、その外方は縁のよくなな平地をなしている（図版第五および第3圖）。この第一列石は二と三〇センチ程度の割石を多く用いている。この列石は、孟宗竹になつている西部では失われ、また東端部で崩れて散乱状態を呈している。第一列石から南へ約七・五と八メートルをへだてて等高線六メートルから六・五メートルのあたりに第二列石がある。高さは約一メートルである。さらに第三列石の南方約三・五メートル、等高線八メートルのあたりに、高さ元約一・二メートルばかりはあったと思われる列石が遺存する（図版第六の下）。

第三の列石がある（図版第六の上）。高さ一・二メートルほどのものである。

次に西側の斜面について見ると、頂上面の端から一・一と二メートルのあたりに急斜面や、転石があつて、このあたりに一つの段なり列石なしがあつたかとも思われるが明らかでない。ところが、そのあたりからさらに西方一五と一七メートルばかりのところ、等高線八・五メートルのあたりに、高さ元約一・二メートルばかりはあったと思われる列石が遺存する（図版第六の下）。



第4図 墓丘 土層実測図

調査区分図や墓域の実測図でも知られるように、墳丘の上面は、かなり広い範囲にわたり発掘をなし、また、列石の清掃その他墳丘斜面については、よほど注意して複数したけれども埴輪は一片も検出しなかつたので、元采埴輪は使用していないものと考へて差支なかろう。さて以上のようないれ石の配置からすると、はじめに述べたように、これら列石の範囲は少なくとも北は急斜面のすその段の所からを墓域としてこのように工事を施したはずであるから、東西は少なくとも五八メートルあり、北は急斜面のすその段の所からを墓域とし、南は第三の列石までとすると約四四メートル

ルの範囲ということになるのである。これだけの範囲を造山第二・号墳の範囲とする、海側については、第一列石の附近を除けば第二・第三の列石のあたりなど、自然の山丘に格別削鑿したとも見えない。西側斜面について見ると、まず頂上面に接する斜面は極めて緩傾斜であつて、開墾のため頂上の土が西側へ推し出されたためであるうと想像されたが、この部分の I-W トレンチを発掘して検討したところ、僅かな耕土の下は地山であつて、古墳本来の斜面であることが判明した（図版第六および第4図）。また西側の列石のあたりを因によって見ても、それがほとんどの自然の山丘の地形そのままであることが知られる。これらのことからしていえば、この古墳は、上面は一応正しい長方形に加工し、墳丘上部については、北・東・南の三方は大体方形頃らしく切削し、西側も一応は後縁をもつように加工したものであるが、それぞれの面を同一傾斜をもつ整然とした方形の墳形を賦するところまでは工事を徹底させたものではないのである。なお墳丘について今一つ注意されることは、墓壇以外の頂上部では、耕作上層の下は地山であつて、いわゆる盛った土として確認できるものは存しないことである。

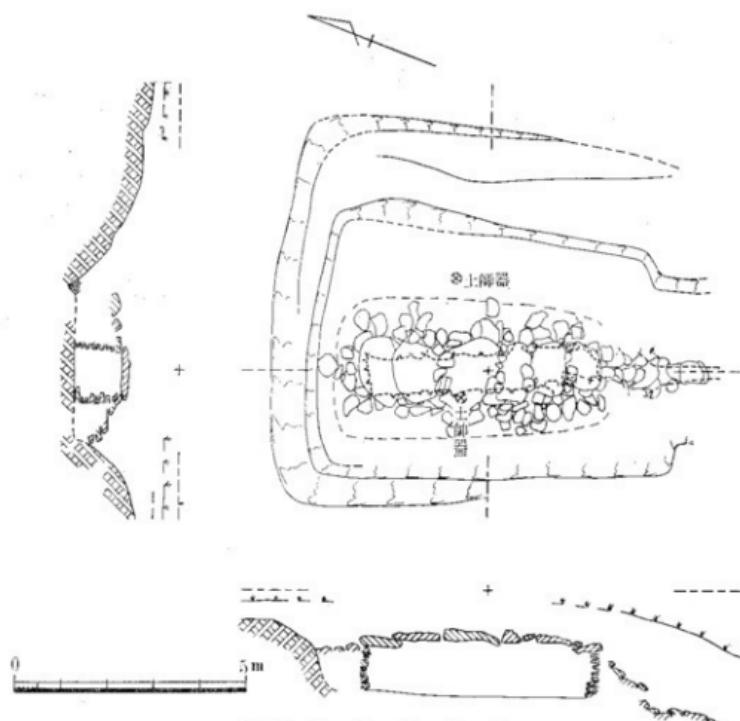
要するに造山三号墳の墳丘は、自然の丘陵の頂上を利用して、その頂上部を簡略に切削して一応長方形に加工したものであり、多くの労を費さず、また緻密な設計もなく製造したものといえる。しかしそれにもかかわらず、墓域としては少なくとも東西五八メートル、南北四四メートルという相当大きな古墳として築造したものである。否あるいはこの丘陵全体を墳丘に見立てたのかときさえも思われる所以である。

## 五 内 部 構 造

主體構造は、半平な割石を小口積みにした、長さ四・七五メートル、幅約一メートル、深さ約一メートルの細長い壁穴式石室一基である。

この石室を構築するために掘削した墓壙は、上縁の東西八・五メートル、南北九メートルのほぼ長方形であるが、石室の蓋石の上面ぐらゐの深さのところで北・東・西の二方は段をなしており、ことに東はこの段が他の側よりも一・五メートルばかりも広くとられている（図版第九と一〇および第5図）。このようにして、蓋石上面の高さの所における墓壙の広さは、北端で約六メートル、南端で約四・五メートル、南北約七・五メートルであつて、石室の蓋石の下面の高さから下は急傾斜で下降し、扣え積みの石の外側とほとんど接している。さきに述べたように、墳頂には耕土のはかには確実な盛り土と認め得るものはほとんどなく、その下は地山であるために、墓壙はすなわち地山を掘削したものであつて、その形状を容易に確認し得る状態にあつた。

石室は、墓壙の中央より西に偏して西壁に密接して構築されている（図版第八の下・第5）。蓋石は五枚の半な割石を長さ五・三メートルに



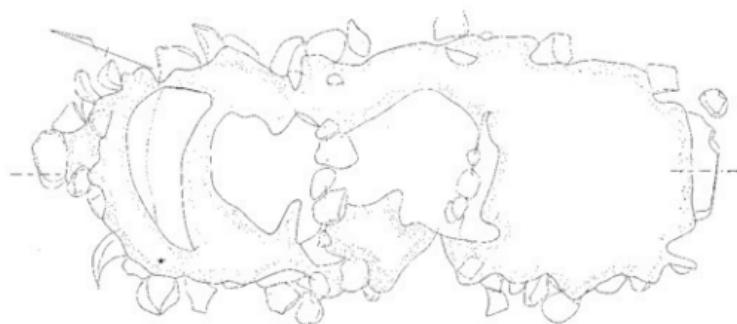
第5図 石室実測図

わたって並べたものであるが、頭の方と思われる北端から中央部にかけて大形の石を用い、足の方である南部は小形の石を用いている。石の大きさは、大形のものは幅一メートル、長さ一・九メートルばかりあり、小形のものは幅六〇センチ長さ一メートルばかりであつて、厚さは一五~二〇センチ程度の扁平な石である。これら蓋石は黒色の石であるが、その表面は白色を呈しており、露出してころがっていた石を多く用いたものと思われる。さてこれらの蓋石と蓋石との接合部には小形の割石を置いて隙き間を塞いだ後、黄色の粘土を五~一〇センチの厚さで被覆する(第6図)。粘土の表面には丹を塗った形跡は全く認められない。なお粘土被覆について注意されたことは、蓋石の全面に及ばず、北端の蓋石の如きは、接合部以外は大部分粘土で覆われていなかつたものもある(図版第八の上)。これは蓋石から地表まで比較的浅いため、後に開墾その他で掘ぜられた部分もあつたためであろう。

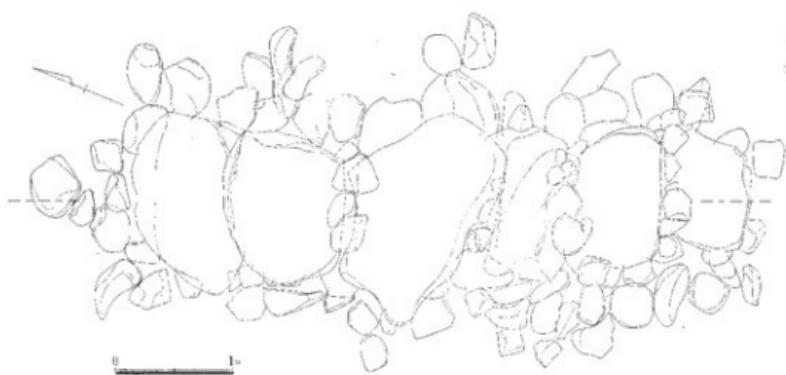
次に石室内部であるが、まずその空間の大きさ

は、頭の方と思われる北端から中央部にかけて大形の石を用いている。石の大きさは、大形のものは幅一メートル、長さ一・九メートルばかりあり、小形のものは幅六〇センチ長さ一メートルばかりであつて、厚さは一五~二〇センチ程度の扁平な石である。これら蓋石は黒色の石であるが、その表面は白色を呈しており、露出してころがっていた石を多く用いたものと思われる。さてこれらの蓋石と蓋石との接合部には小形の割石を置いて隙き間を塞いだ後、黄色の粘土を五~一〇センチの厚さで被覆する(第6図)。粘土の表面には丹を塗った形跡は全く認められない。なお粘土被覆について注意されたことは、蓋石の全面に及ばず、北端の蓋石の如きは、接合部以外は大部分粘土で覆われていなかつたものもある(図版第八の上)。これは蓋石から地表まで比較的浅いため、後に開墾その他で掘ぜられた部分もあつたためであろう。

次に石室内部であるが、まずその空間の大きさ



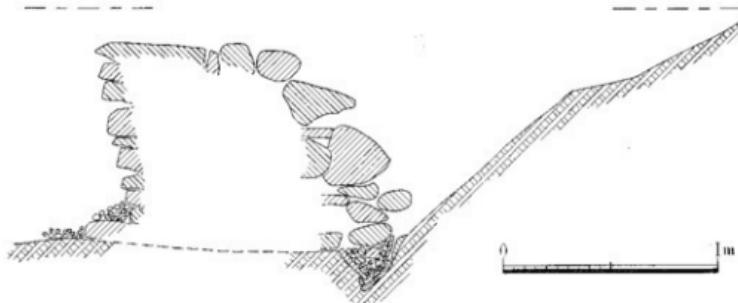
第6図 石室蓋石柄上被覆状態実測図



第7図 石室蓋石実測図

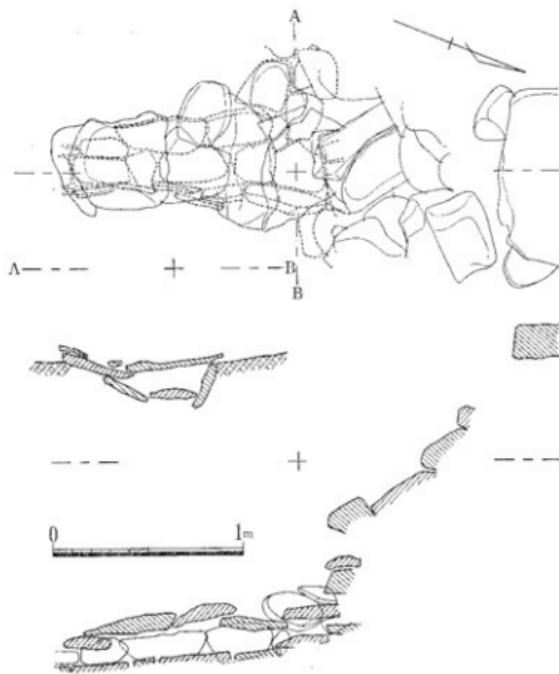


第8図 石室上面実測図



第9図 石室外部東側排水溝断面実測図

さは、継すなわち南北の長さ四・七五メートル、幅は頭の方と思われる北部で一メートル、南部で九〇センチ、中央部で約九五センチあり、床から天井までの高さは北部で九〇センチ、南部で九〇センチあり、室の床面は地表から約二メートルばかりの位置にあたっている。室内について、とくに注意されるのは床面の構造である。床面が横断面においてU字形にくぼんでいるのは、いわゆる御竹形木樋を収容したと思われるこの種の堅穴式石室の通例に則るものであるが、特色のあるのは粘土床ではなく砾床であることである（図版第一二）。壁に沿うたところでは七〇センチ乃至一〇センチばかりの大形の川石を用い、中央部は二三センチの小さな川砂利を用いている。砾の厚さは、側壁に接する所では二五センチ以上、中央で一〇センチばかりで、その下は地山を削った平面であつて、側壁の削石はこの地山面から積み上げている。床の構造として第二に注意すべきは、細長い室底の両端から四〇センチのあたりと、中央部との三ヶ所に、それぞれ側壁に接して長さ一〇~五〇センチ、厚さ一三~一五センチばかり、幅二五~二七センチほどのまあるい川石を、それぞれ対称に配置していることである。おそらくまた削竹形の木樋を置く際に、これらによって樋を安定させる目的を以て配置したものと思われる。なお石室内の北端の壁から二〇センチの所に、壁と平行してほぼ中央に幅八センチ長さ約一五センチ高さ約一〇センチの粘土塊が砾床面に乗つており、同様に南壁から約二〇センチの所にも幅約一〇センチ、長さ二〇センチ、高さ八センチばかりの粘土塊が遺存した。床の構造として第三に注意されるのは、砾床の下に設けた排水溝である（図版第一五の上）。すなわち、室の中央を縦断して砾床下の地山面を掘り、小形の扁平な割石をV字形に並べたものである。幅約二五センチ、深さ約一五センチの溝である。それが砾床の下に設けられているのであるから、室内に侵入した水は溝を通って尽くこの排水溝に集約されるようになっている。なお砾床の北端と南端とでは高さが一〇センチ以上低くなっているので、溝に集ま

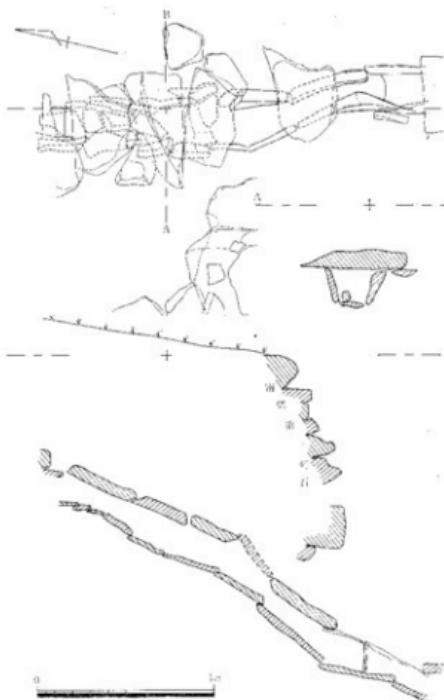


第10区 石室外部南側排水管実測図

つた水は南端に向かって流れ、室外に導かれる仕組となっている。室の南壁根の下を透った溝は後に記すように南壁の扣積石の外へ出るところで、東壁と西壁の扣積石の外側の排水溝と合流して墳丘の南斜面の下を南側第一列石の下へと導かれている。

次に石室の壁石は、いわゆる扁平な割石の小口積の手法によるもので、この種の古式の堅穴式石室の通例にしたがうものである。個々の石材についてみると、幅は六〇センチ内外のものが多く、厚さは一〇～一二センチ程度のものが多いが、中には一五センチ程度のものもある。また広い方の面には、丸味を帯びた面をもつるものもあり、川石・野石の類を削って用いたものも少なくないと思われる。それ故この種の石室としては、その積み上げた面はやや粗雑な感じを与えるのである。石と石とを積んだ空隙には黄色粘土を詰めたものであろう。それと思われるものが諸所に遺存する。次に室壁の形態に關し注意されることとして、隅角部を既然と直角に積まず、まる味をもたせて構築していることである。僅かにこうした傾向のものは、時に見られることもないようであるが、この石室の場合はその程度がやや極端なという印象を与える。

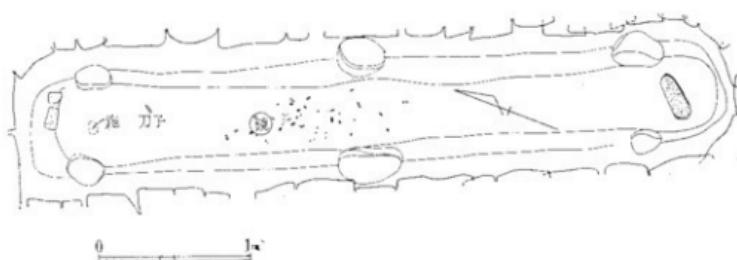
次に扣積であるが、東側を発掘して点検したところでは、室壁を構成する石の外側には扁平な割石のみならず比較的扁平な野石などもまでて積み、扣積の外縁の下部は蒸発壁のすぐ近くまで及んでいる。東側の扣積は、石室の壁の内面から計って、上部で約一メートル、下部で一・三～一・四メートル



第11図 南側第1列石附近の排水溝実測図

である。墓壇壁のすその所、扣積の外縁の底ぎわの所に石室の底と同様に、小形の扁平な割石を以て断面V字形の排水溝を設け、溝内には僅二センチばかりのまるい砾を詰めている（図版第一五の中および第9図）。この溝は石室の底の溝よりやや低い位置にある。すなわち石室壁石の下の地山面は室外の排水溝の方へ僅かに傾斜した面をもつよう削りその上に扣積をしたものであり、扣積を伝うた水もことごとく室外の排水溝に集結できるように構築したものである。このような墓壇壁のすその排水溝は東西両側にあって両方へ走り、それは室の南側の不積の外縁の中央で、前に記したように石室中央を経貫した排水溝と合流するのである（図版第一五の下および10図）。三者合流した溝は扁平な割石で構成した蓋のある暗渠（断面逆梯形）となり、南側斜面の地下を降下し、南側の第一列石の下を通り、さらに下方へと通じている。この暗渠は、合流点では蓋裏の幅約五〇センチ、深さ一五センチであるが、第一列石のあたりでは蓋裏の幅二〇センチ、底面の幅一五センチばかりである（図版第一六および第11図）。

さてこの石室が、墳丘上において占める位置は、墳丘頂上面の東西のはば中央に位しているが、頂上面の南辺と北辺との関係からいふと極端に南に寄っている。そのため頂上面の北半部にも何等かの主導構造があるのでないかと疑われたが、発掘して検討したところ、そうした構造の存しないことは、さきに述べた通りである。このように南に偏在するには奇異の感をいたしかせるが、南側の第一列石の所を三・五メートルの等高線が通つており、北側の三・五メートルのあたりは、そこまでは急斜面で、そのあたりから段の面のような緩斜面の姿をとりあたかもそこが墳丘のすそのように造られていることに注意し、



第12図 石室内造物出土状態

(ここにも列石が埋没しているかもしれない)。破りに南北両斜面で二・五メートルの等高線を抑え、その中点を求める、それはほぼ石室の中心に近い位置にあたっていることになる。それ故この古墳の築成にあたっては、このような意味で墳丘の中央に石室を構築する意図であったことが推測される。あるいは、南側にはさらに土盛りをして墳形を完成するつもりであったかもしれない。(この部分の封土が流失したことでも考られぬでもないが、それならば列石などはもつと埋没しているはずである)。

## 六 遺 物

発見された遺物の品目をあげると次の通りである。

墓域内の埋土の上部から検出されたもの

土師器片

器台破片

小形玉破片 (一種)

低脚式高環破片 二

石室内部から検出されたもの

土師器片

器台破片

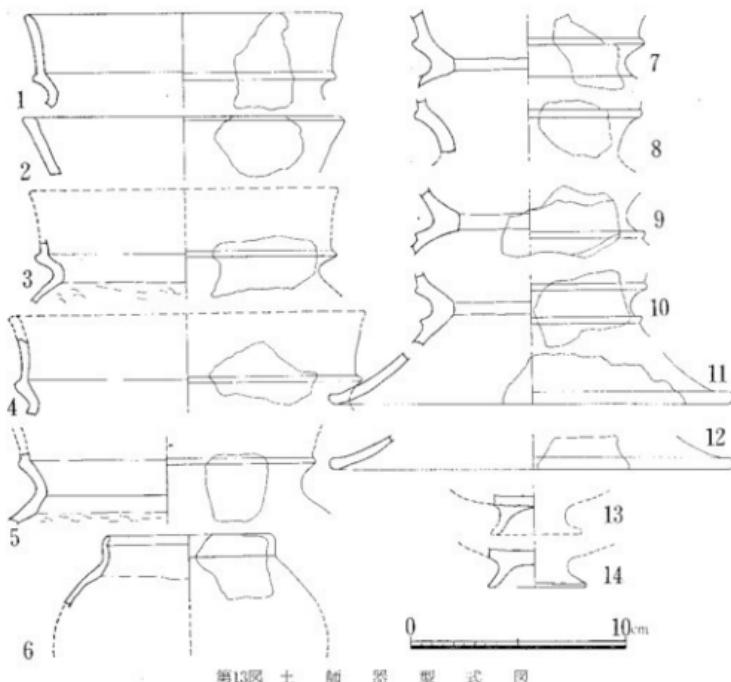
小形玉破片

三角縁二神二獸鏡 一

玉類

碧玉製管玉 二〇

(内 太形二二 細形八)

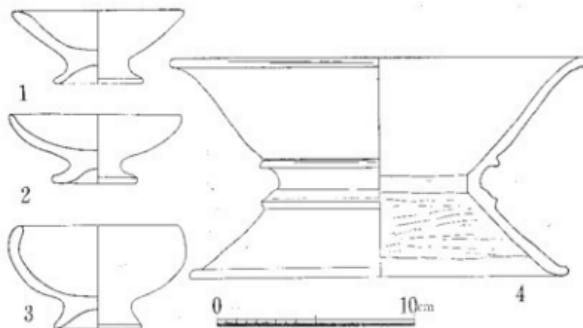


第13図 土 脇 器 型 式 図

ガラス製小玉  
二・二

刀子  
やくしの  
鉈  
なべ

まず土脇器であるが、図版第一七に示したのは器形や部分の大体弁別できるものを選んだのであって、石室の内外から検出されたものと總量は写真に示したもののは十倍ぐらいはあるが、細片かまたは蓋の洞部などである。まずその出土位置からいうと、石室外で発見されたのは、石室の蓋石列の中央部の上の埋め土の直經約二メートルばかりの範囲と、その東方、蓋石の中央から二メートル離れた地点の径二〇センチばかりの所とであった(第5図)。深さは、蓋石の上方では地表下五〇センチ内外で、中には蓋石をやや外れた所では蓋石の下面に近い位置のものもすこしあつた。東の方に離れて検出された破片群は地表下五〇と七〇センチの位置から検出された。次に石室内から小破片が検出されたのは、やや古異の感を与えるけれども、石室内には所によつては一〇センチ以上も埋土が流入しており、それに土脇器が混じた状態で発見されたので、石室外の墓壙の埋め土に混じていたものが陥入したものと判断



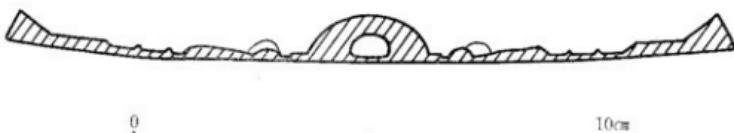
第14図 土師器参考図（1鋸尾 2大成 3松本1号 4小谷）

された。蓋石の粘土の被覆は簡単であり、欠如する部分も少なくない状態であったから、空隙から漏れて陷入する可能性は十分あつたと思われる。（木の根に押されたり、果樹を植えたりした場合あり得ると思われる）。それ故これらの土師器はもとほして埋め土に施していたものとして一括して取り扱つよいと思う。形式や質の上でも全く区別し得ないものである。これら土師器片は、胎土はいわゆるこし土ではないが大形の砂粒は含まず、薄手で明るい赤褐色を呈し、そこなる脆くなつていて破片の接合はほとんど望めない。それ故個体数を推定することは困難である。

まず器台について見るに、上下の中央にくびれがあり、その上下に突起状の後縁をめぐらし、そこから上と下と双方へ外反しながら長く口縁と脚とがのびてあたかも断面が5の字形の口縁（いわゆる二重口縁あるいは複合口縁）をもつ古式の委形土器の口縁のような具台になつているもの——文字通りの鼓形器台——である。この類のものは山陰地方の古式土師器ではまつとも多く見られる品であり、古墳出土例では島根県三刀屋町松本1号墳（注2）にも

その例のあるものである。この禮器台の跡流は、山陰の弥生式土器の終末期に比定できる安来市九重土器墓出土の九重式土器（注3）に見られ、定形化したものは同市御尾土器墓で多数検出され、古式土師器の期間に盛行するものである（注4）（第13図7と12）。なお第14図参照）。小形壺は一種の器形が認められる。すなわちその一つは、いわゆる5の字形口縁をもつ式のもので、「径一〇センチ余りの品で、底部は確認できないがこのような小形品は早くから丸底化するので、これも丸底と考えられる。肩部に施文があるかどうかはいたみが甚しいので不明である（第13図1と5）。第二の者は「センチもない短かい頸がやや内傾するものであつて、極めて薄手であることが注意される。（第13図6）」

低脚式高杯と仮称したものは、径二・五と四センチ内外の小さく低い脚をもつもので、环部はやや深く口縁が内湾する式のものと、环部の浅いものとあり、後者に甚だ浅くかつ口縁は直線状に大きく開き、むしろ盃と思われるような品もある。この種のものは、山陰の古式土師器の初期と考える安来市御尾の土器墓群にすでに出土例が認められ、古墳出土例では安

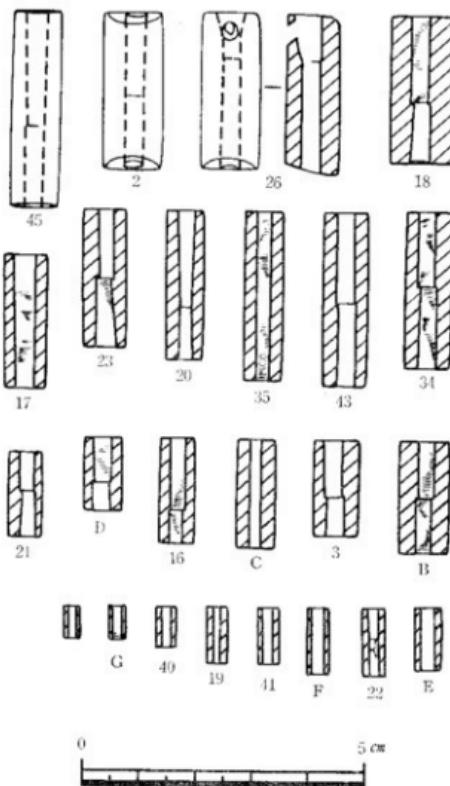


第15図 鏡 断 面 実 撮 図

来市荒島町大成古墳・飯石郡「刀屋町松本」号墳などいずれも前題型の古墳からの出土品がある(註)。(第13図・14。なお第14図参照)。

以上述べた十師鏡は細片であるので、その時期等について細かな判定は困難である。しかし須恵器出現以前の古式土師器としての特徴は明瞭である。

鏡は船載品であつて(國版第一七および第15図)、いわゆる半肉形式神獸鏡に属し、鏡面の直徑一五・四センチ、背面深一四・五センチ、縁は高さ七ミリの三角錐であつて、鏡面の反り四・五ミリ、点々と誘化してうけた部分もあり、広く割れ目も生じてはいるが、全体がかなり暗褐色を帶び、文様は鮮明である。鏡面も大半は光沢を保っている。



第16図 鏡 片 実 撮 図

		高さ mm	長さ mm
		直角 mm	直角 mm
上段左より	1	18	11.2
	2	4	9.8
	3	26	9.8
	4	2	9.0
	5	3	8.3
	6	6	7.9
	7	番外 b	9.1
	1	番外 a	8.2
	2	34	8.2
	3	23	8.0
	4	46	7.0
	5	35	6.8
	6	43	7.8
	7	45	8.8
下段左より	1	20	7.1
	2	44	8.3
	3	17	7.5
	4	番外 c	7.5
	5	38	7.0
	6	16	6.3
	7	番外 d	6.8
	8	21	6.0
左より	1	22	4.0
	2	番外 f	4.5
	3	番外 e	4.8
	4	19	3.5
	5	41	4.0
	6	40	3.9
	7	番外 g	3.0
	8	番外	3.0

青玉計測表

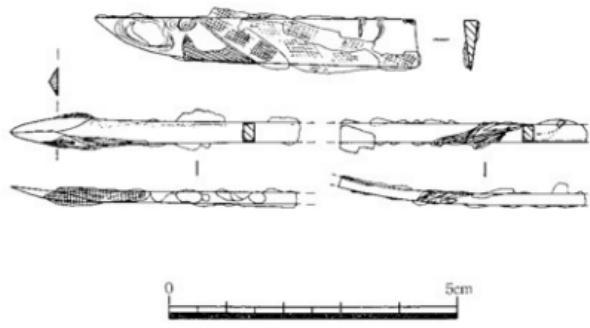
三角様の内に外向笠面文、複線波文、外向織目文を配し、そこから内は一段低くて織目文帯をめぐらした内に銘帯をめぐらす。内区には円座をもつ頭のまるい乳を四個配し、各乳の間に獸形を一駄ずつと、羽翼をもち冠をつけた人物二体ずつとを配したものである（国版第一八）。鉢は径三六ミリ高さ八ミリあって円座をもつ。内区の文様は半肉彫り式に表山され、人物の顔面は横向き前向き、斜横向き等変化のあるかなり柔軟な表現をとっている。

鏡の大きさ、文様および表出の手法等、早くから紹介された朝鮮大同江面怡野田煉瓦土取場発見の鏡（注）によく似たもので、ただ人物の顔の向きなど僅かな相違がある。また大和佐味田宝塚（注七）、河内津守城山古墳（注八）、振津岡本ヘボン塚（注九）、遠江庚申塚（注十）等の出土鏡に類するものである。銘文は左まわりに、

吉作閑窓自古紀念人鏡（注一）  
（吉作閑窓自古紀念人鏡）

とある。この鏡は、石室中央よりやや北寄り石室北端の壁から一・五四メートルの所に、礎床面から僅かに浮いて遺存した。すなわち鏡の両端は床より二・三センチほど浮き、北の端は床から一・センチばかり高い位置を占めて僅かに傾斜していた。

玉類のうち鈴玉製管玉は合計三〇個あるがそのうちの一、二個は太形である（国版第一九および第16図）。色は淡青色といった方が近い。磨研は全面極めて良好で光沢がある。孔はすべて両端から穿ったもので、両端における大きさに余り相違がなく、また両端から穿った孔が中央部でかすかなきわを残したものもあるが、ほとんどが見えなくなるまでに研かれていた。また孔の内面にわずかな倒転の痕跡をとどめるものもある。二、三個を太形としたけれども、実は極端な大形品ではなく、計測表に数値を示したように、もつとも太いもので僅一一・二ミリであり、



第17図 鉄器実測図

また細いものは六ミリである。長さはもつとも長いもので三五・二ミリであり小形のものは一二・七ミリのものもある。この種の玉のうちの一つには端に近い側面から斜に一孔を穿ったものがある。次に八個ある細形の方は太形のものよりも一般にやや色が濃い（図版第一九の下）。太さは最大のもので四・八ミリ、もつとも細いものは二・五ミリであり、長さはもつとも長いものが一二ミリ、短いものは五・五ミリである。いずれも両端から穿孔している。管玉はすべて古式古墳に通有の特徴を示すものである。ガラス小玉は、直徑四ミリ内外、高さ三・五ミリ内外のものが多いが、中には四ミリ程度のものもある。色は淡青色であり、かなり多くの気泡が認められる（第16図の下）。やはりその色合など古式古墳に多いものに属する。玉類の遺存した位置は、鏡の中心から北へ二二センチばかりの所から、鏡の南約一メートルの間、すなわち南北一・二メートルの範囲で散乱していたのであるが、鏡の南二・三〇センチのあたりにもつとも多く集まっていた。それは石室の中での位置からして、遺物の頭部の置かれていた位置の附近と考えられる所である。

鉄器のうち、刀子は闇の所から先端までのもので茎の部分を欠く（図版第二〇および第17図）。長さ五・二センチ、幅約九ミリ、厚さ四ミリほどの小形品である。柄の部分のないのは発掘の際に散佚したこととも考えられるけれども、附着している布の形は闇の所の切削面を覆うような形になっているので、副葬したときすでに病のないものであつたことが知られる。布は斜めにあててぐるぐると巻いた形でいく重かに厚くまたかなり広く附着している。布は平織で、縫は一センチにつき約一六本、縫は一センチにつき約二〇本ほどの割合で通っている。この刀子は石室の北壁から一メートルばかり、床の中央よりやや東寄りの位置に遺存した。

鉈は極めて細形のもので、欠損部があつて正しい長さは不明であるが、現存部長さ九・五センチあり、先端は蛇頭形で、その広い部分の幅約六ミリである。柄の部分は幅約四ミリ厚さ約三ミリあり断面は長方形である。先端部には約四ミリほどの反りがある。先端部の断面は低い三角形に近い形である。この鉈にも布が附着している。やはり平織でその構成は経一センチにつき約一六本、縫は一センチにつき約二〇本ばかりである。これら鉄器のうち刀子は石室北壁か

ら一メートルばかり、施も刀子の附近から発見された。

## 七 結

言

以上述べたように、造山第三号墳の発掘調査により、その墳形・墳丘の修飾および墳丘の土層構成等の概要、内部構造の細部、主体内部の副葬品、主体附近の遺物等について明らかにすることができた。すなわち墳形は方墳の系統に属し、その頂上面は長方形を呈し、埴輪を認めず、斜面または墳丘のすそと思われる位置に一段乃至三段の石頭状の列石を設けたものであるが、墳丘を营造するに際し自然丘に対する加工は簡略であつて、四方をそれぞれ正しく対称の形をとるまでに徹底せしめず、また墳頂には盛り土を施したか否か明瞭でなく、初めには盛り土を施したものであったとしても極めて少ないのであつたと思われる。内部構造は、やや長方形の墓室を深く埴山に穿ち、構内に扁平な剖石を小口積みした細長い竪穴式石室を一基構築したものであるが、石室は粘土床をもたず、礫床を用いたこの種石室としては他地方には例の少ない手法を以てし、さらに宇の内外には入念な排水溝の構造を備えていることが注意せられる。石室の上方から土器が出土されたことは古式古墳に間々例のことであるが、細片ながらある程度形式を判別し得たことは幸であった。副葬品としては、船載の三角縁神獸鏡・面は優秀な品であるが、碧玉管玉二〇個、ガラス小玉三三のほかは、小鉄器僅かに二個であつて、墳丘並びに主体構造の規模と対照して副葬品が偏少であることが注意される。

さて以上のように、この調査によって判明した事実に關連する若干の問題について触れておくこととする。まず第一に墳形が方墳の系統に属する点であるが、さきに述べたように、造山古墳群三基のうち第一号墳は大形の方墳であり、第二号墳と同様竪穴式石室をもち、全国的にも方墳中の古い様相のものとして注意されるものであるが、第二号墳は前方後方墳であつて、やはり方墳と密接な関連のある墳形と見られるものであり、三基とも方形の系統に属することが注意される。昭和二六年のころには山梨国内に方墳は三、無検出されていて(註)、山梨にのみこのように多数集中している点が注意されたのであつたが、現在では大少合わせると二〇〇基ばかり判明しており、積極的に調査するならばそれに數倍する方墳がこの地方にあることが判明するものと予測される。これら方墳のうち内容の判明しているものは、二七基ほどあり、それらの知見からすると、多くの方墳は古墳時代前期、中期に属するものであつて、後期初頭のものが若干あり、後期中葉以降のものはむしろ稀である。(なお九〇基のうち、近年工事等で破壊したものは三四基におよんでいる) このように県下、とくに山梨地方の古墳文化に特色を与えてい

方形墳の中では、造山三号墳は比較的大形に属し、また時期的には後続の通りそれの中でも古い時期に属していると考へべきものであることは、この発掘調査により地方古文化の解明に益することを期待されたことに對し副うところがあつたといえる。墳丘について注意される第二の点すなわち石垣状の列石であるが、この種の構造は諸所にその例のあるものとされているが、この附近ではこの種の設営をもつものが多く判明しており、この地域の常習となっていたかとも考へられる。すなわち造山古墳群では第一号・第二号ともにそうであり、同じ荒島町の仏山古墳、それと余り遙かない西赤江町の官山古墳（旧称「神冢古墳」）にも認められる。さてこのような石垣状の列石は、岡山市都月一号（222）墓のようないち生式時代終末期」とされている方形の墳墓を見られるものとの間に系統上の関連を考えざるを得ない。それは墳形に関する問題である。なお石垣状列石の性格、すなわちそれを設けた主な目的であるが、齋藤忠氏（注四）は「外週列石」の名を用い「埴輪円筒列の代りとか、あるいは埴輪円筒列との時間的推移によつたものとかではなく、埴輪円筒列とは無關係に、封土を保護する施設として特殊な存在をなししたものとすべきであろう。」とされているが、この地方の実際について見ると、それが設けられているのは墳丘のすそといつても、地山を切削形成したすそであつて、必ずしも外護を必要としない位置に多く見られる。造山一号墳も、その位置から考へてそれと推察され、発掘によつて確認された西赤江町の官山古墳（注五）はその明瞭な例であり、さらに墳丘の断面が残存している荒島町の仏山古墳もそうである。ことにこの造山三号墳では、ほとんど自然丘の形そのままと思われる南側の第二、三列石の場合がそうである。このような実状からすると、麻城を区画し、また墓域を施ることに主な目的をもつものと考えられる。もちろん本来の意義が失なれ習慣的に設けられる場合も考えられるが、この種列石と岡山市都月二号墓のようないち生式時代のものとの間に系統上の関連があるとすれば、同墳にも相似した列石があるが、同墳は盛り土はあるとしても、小形のこの種の墳墓に必ずしも実用的意図をもつて列石を配したとも考へ難いから、この種列石の性格は本来実用的というよりも、むしろ精神的な意味をもつてゐたとすべきであろう。造山三号墳の場合は必ずしも本来的な意味を失つたものではなかろう。

次に内部構造の問題であるが、細長い要穴式石室として、大体の特徴は前略型古墳に見られる石室の通例に則るけれども、床面が疊で構成されている点が異っている。ところで、山陰における堅穴式石室の類をあげるとおよそ次のようなものがある。

安来市荒島町造山一号墳

タタタ 大成古墳

鳥取県東伯郡羽合町橋津馬ノ山四号墳  
出雲市東林木町大寺古墳

鳥取県西伯郡從江町福岡上の山古墳  
松江市竹矢町上竹矢丘陵上の一古墳

西川津町金崎一寸墳

これらのうち上の山古墳(庄)は約三〇メートルの帆立貝式とも見る墳丘をもち、椎・家形等の通輪を出しておらず、大小二個の石室があるが、その大形の方は長さ四・一メートル、幅八〇×六五センチでやや小形に属し、遺物も仿製小形円行花文鏡、赤めのう勾玉、綠石製勾玉小玉等を出しておらず、中期的様相の古墳である。上竹矢の古墳も墳は島平削石小口積であるが小墳であり室も小形であつて副葬品はない。金崎一寸墳は前方後方墳で石室は長さ四メートル、幅約一メートルのものであるが、底面は平で礫をしき、副葬品にはめのう勾玉やことに古式須恵器があつて、中期末ごとと考えられるものである。大寺古墳は、丘上の前方後方で古式の様相を示すが、石室は長さ約四メートル、幅約八〇センチあり、粘土床であるがやや小形の石室である。そこでこれら上の山、上竹矢、金崎、大寺を除き、大形で古い様相の古墳としては、造山一寸墳・大成古墳・馬ノ山四号墳が注意される。

まず造山一寸墳は大形の方墳で、第一号石室は長さ七メートル、幅一メートル、高さ一メートルのものであつて、その床面はU字型に亘る礫床であり、床面の下に排水構造があり、その端は墳丘斜面に至っていることが知られていて、造山三号墳と極めてよく似た構造であることが注意される(図版第二の上)。次に大成古墳もやはり方墳で、造山一寸とよく似た石室と思われる(庄)。その床面は梅原博士の示された図によつて見るとやはり礫床と思われる。U字状にくぼむか否か指摘されていないけれども恐らく造山一寸と同様のものと思われる。馬ノ山四号墳(庄)は典型的な前期型の大形前方後方墳(全長八メートル)であつて、主体は後円部に堅穴式石室と箱式棺が並存する。その堅穴式石室(図版第二の下)は長さ約八メートル、幅約一メートル高さ約一メートルあり、その壁の構成といい、黨々たる典型的なものである。その床はやはり礫床である。このように見てみると、山陰の典型的な古式の堅穴式石室は、造山一寸、大成・馬ノ山四号、そして造山一寸といづれも礫床構造であることが強く興味をひくものである。畿内を中心として分布するこの種石室はほとんど粘土床に統一されているのに対し、他の点では畿内のこの種石室と同様の特徴を備えながら、山陰のこの種石室が床面に関してはこのように共通した礫床であることは注意すべきことと思われる。これらとは異なり中期様相のものながら近年明らかにされた岡山縣總社市隨庵古墳(庄)などのような礫床との間の系統的関連もないとはいえないのかもしれない。棺床を固定するための大形の石を數個配置する手法にも類似が見られる。堅穴式石室ではないが、岡山縣の月ノ輪古墳(庄)などのように、粘土扉の礫床との関連も問題になると思われる。剖竹形木棺を収容したと思われる堅穴式石室の床面を礫床とするこ

とは、粘土床から二次的に生じた墳落形式であるのか否かは簡単に判断できない問題であろう。いずれにしても山陰地方に多いことは注意すべきである。それは排水構造の形式とも関連して考察るべき課題であろう。

最後に造山二号墳の年代について触れておきたいが、個々の遺物なり遺物の組合せ等という点からすれば「応神期古墳」として才高はないであろう。ただ造山一丹墳と比較するならば、その位置の関係や石室がやや相違であること、やや小形であることなどから漠然とではあるが一時墳より後に造られたという印象を与える。その「丹墳の年代的位置について」、例えば森藤忠氏「日本古墳の研究」附録の「古墳編年表」では四世紀末のあたりに記載されており、河出書房「日本の考古学IV」の大塚初重氏の「古墳の要述」では「前II期」として取り扱われ、同書の「古墳文化の地域的特色」中の池田潤雄氏等の「山陰」のところに掲げた「山陰古墳編年表」では四世紀中ごろのあたりに造山と大成とが記されている。これらは、いずれも編年の具体的な根柢が一々示されていないので、そのまま基準として利用することが躊躇される。造山二号墳では一室から仿製かとされている舞鹤文帶縁の方格規矩鏡と切妻三神二獸々帶鏡が出ており、一室からは舶載と見得る舞鹤文帶縁の方格規矩鏡と碧玉製鋸鉋などが出土している。小林行雄氏の提唱された(昭和)、鏡式の組み合わせ、仿製鏡における三角縁御鏡と後深鏡を組したものとの前後鏡、預玉型の腕輪等の石製品を伴うものの時期順等を考慮されているかとも思われるが、なお検討すべき課題を多く残しているようと思われ、さらに別な原理によって年代推定が必要があるようと考えられる。大成古墳では舶載の三角縁二神二獸鏡と鉄劍・鉄製環環頭大刀等を出土しているが、遺物は多くはなく、これらは必ずしも右のような順序によつて位間づけ得ないのではないかであろうか。大成古墳では土器の完形品も出土しているが、造山二号墳では土器の形式を推察し得る円筒形とも思われる品が検出されている。末期の弥生式土器および古式土器等に関する正確な編年は不十分であり、また諸地域間における諸形式の時間的平行關係も十分明らかにされていないので、土器等によつて古墳の編年を裏付けることは今直ちに可能とはいえない。

しかし近時われわれの行った調査では、古式古墳から理辨に偏重するとと思われる土師器が検出されるのは決して稀な例ではないから、この方面から編年を裏づけることは大いに期待がもつてることであり、また努力すべきであろう。造山三号墳でも理辨に關するものと考えられる土師器が検出されたが、細片であつて、直ちにこれを以て年代を論ずるには足りないけれども将来においては何程か役立つことと期待できるであろう。

### 注

- 島根県教育委員会「島根の文化財」第二集(昭和二八年)。森吉成「出雲國能郷郡川島村出土の遺物について」(考古学雑誌)。(昭和二六年)。
- 山本清「出雲縣における方格鏡と預玉後方鏡について」(島根大學論集)。(昭和二六年)。
- 柳原木治「丹波國南桑田郡鎌村の古墳」(考古学雑誌)。(大正七年)。

- 梅原末治「出雲國に於ける特殊古墳」(『考古学雑誌』)のIII(昭和10年)、右に同じ。
- 鈴井紀實・山本清「安来市吉山古墳の発掘」(平凡社『山陽・隠岐』(昭和18年))
- 3に同じ。是頃の文化財第三種。
- 山本清「西宮家の横穴について」(高松大学論集八(昭和30年))
- 山本清「高麗古代文化遺物」所収「山陰道の古墳」(昭和31年)
- 山本清「横穴の形式と時期について」(高松大学論集一(昭和17年))
- 山本清「島根県安来市鶴見の土師窯とその土師器」(日本考古学会第21回研究発表会(昭和38年))。同「山陰の土師器」(高松大学山陰文化研究紀要六(昭和40年))
- 近藤正巳「足利承安平野における土師窯」(古代文化三六編(昭和41年))
- 鹿屋市教育委員会「松本主張調査報告書」(昭和38年)
- 近藤庄助「鹿屋主張米平野における土師窯」(高松大学山陰文化研究紀要六(昭和40年))。なおこの式の器台は墓内にも見られるが山陰のように施設するものではないようである。関東の五箇類窯からも器台が検出されていることは注目すべきであろう。
- 右に同じ。
- 梅原末治「北野跡古墳の古墳」(『山陰の研究』新文)の考察により。
- 高岡義教「石室の研究」(同)により。
- 全  
後藤守一「古墳祭典」の算出による。
- 山本清「出雲國における方形墳と前方後方墳について」(同)。およそ同書所載の算出と同じく「日本の古墳時代」の中の鎌木義國「祭祀と古墳」および同書所載の算出と同じく「日本の古墳時代」の中の近藤正巳「古墳
- 発生をめぐる諸問題」にれる。
- 森藤忠「日本古墳の研究」七三二・七四二一。
- 駒井・山本「安来市吉山古墳の発掘」(昭和35年)
- 佐々木古代文化研究所「福岡古墳群」(昭和35年)
- 梅原末治「丹波国高桑田郡高桑村の古墳」(昭和37年)
- 佐々木古代文化研究所「高山古墳群」(昭和37年)
- 越木義典「高社山陪塚古墳」(昭和39年)
- 近藤義教「弓の輪古墳」(昭和39年)
- 小林行雄「古墳時代の研究」第五章「前期古墳にあらわれた文化の二相」

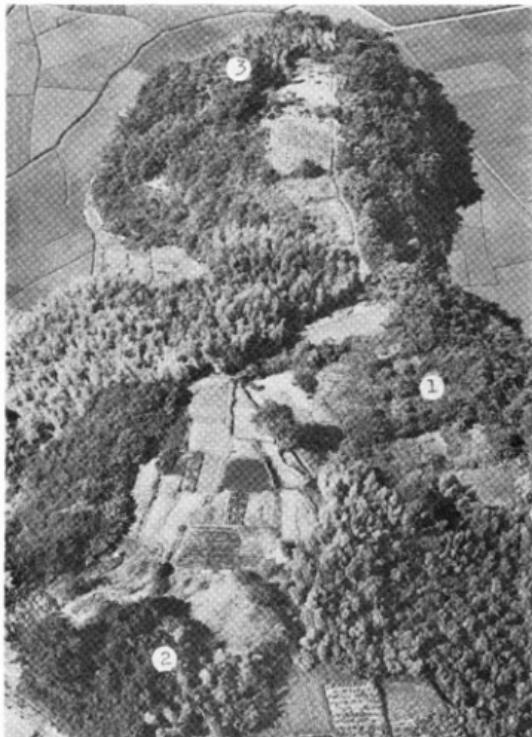


造山遠望（左頂上第一号墳、中央頂上第二号墳、右端頂上第三号墳）



造山第三号墳全景（東方の第一号墳頂上から見る）

図版第二  
空中から見た造山



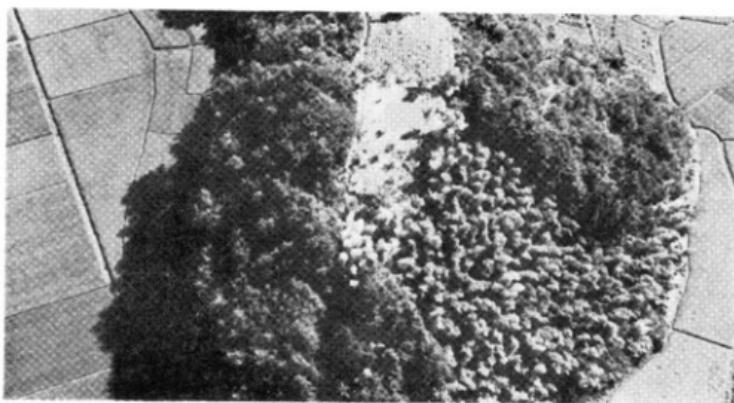
←第三号墳

造山古墳群  
(東方から見る)

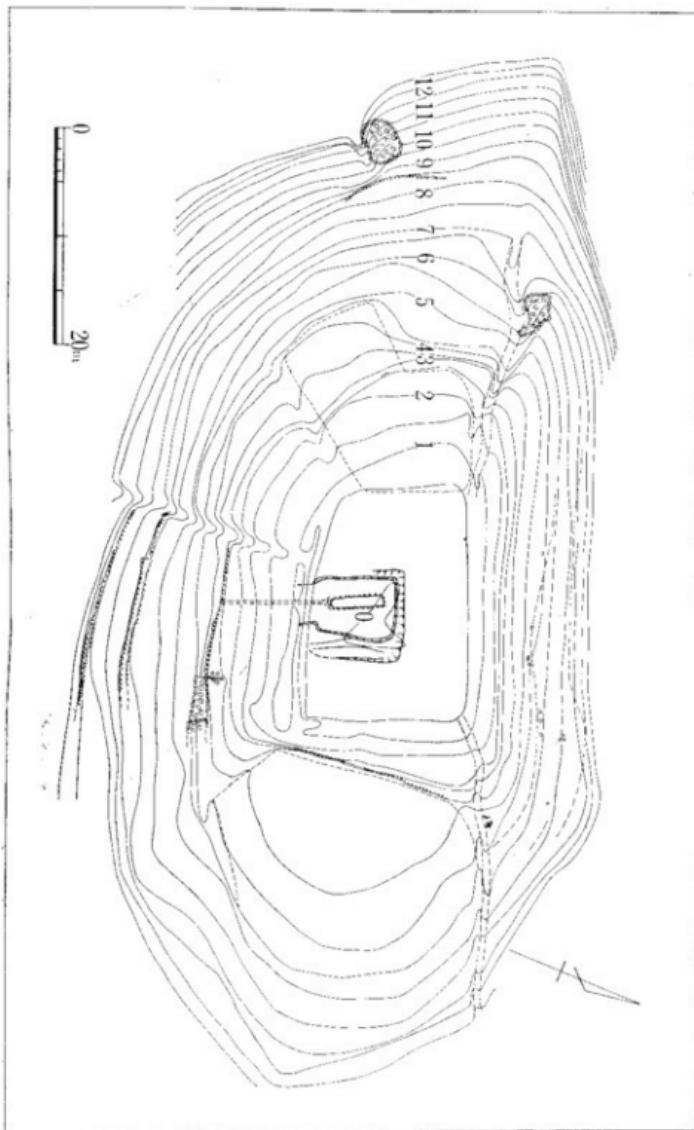
←第一号墳

←第二号墳

第三号墳  
(西方から見る)



図版第II 填丘実測図





墳丘の東斜面



東側墳丘すその列石

図版第五

南側第一列石および第二列石

南側第一列石（西から見る。手前の発掘したところの底に排水溝が見える）



南側第二列石

南側第三列石



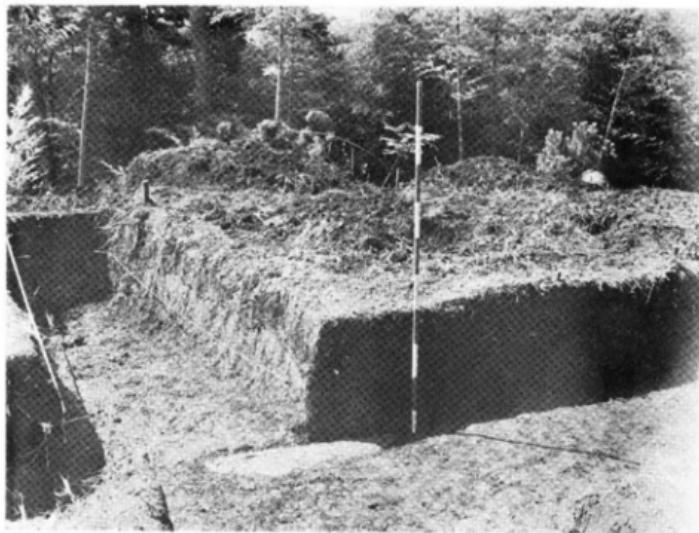
西側列石



図版第七 墳丘頂上面およびI・IIトレンチ発掘状況



墳丘頂上面 発掘前の状態（中央Iトレンチ—東から見る手前からII<sub>2</sub>、I<sub>2</sub>、I<sub>1</sub>）



I a[X] 蓋石検出の状況（手前はI<sub>2</sub>、左前方IIトレンチ）

図版第八  
墓塙と石室の蓋石（一）



蓋 石 粘土被覆状態（北方から見る）



墓塙と蓋石の露呈状態（南方から見る）



墓 塚 と 石 室 (東から見る)



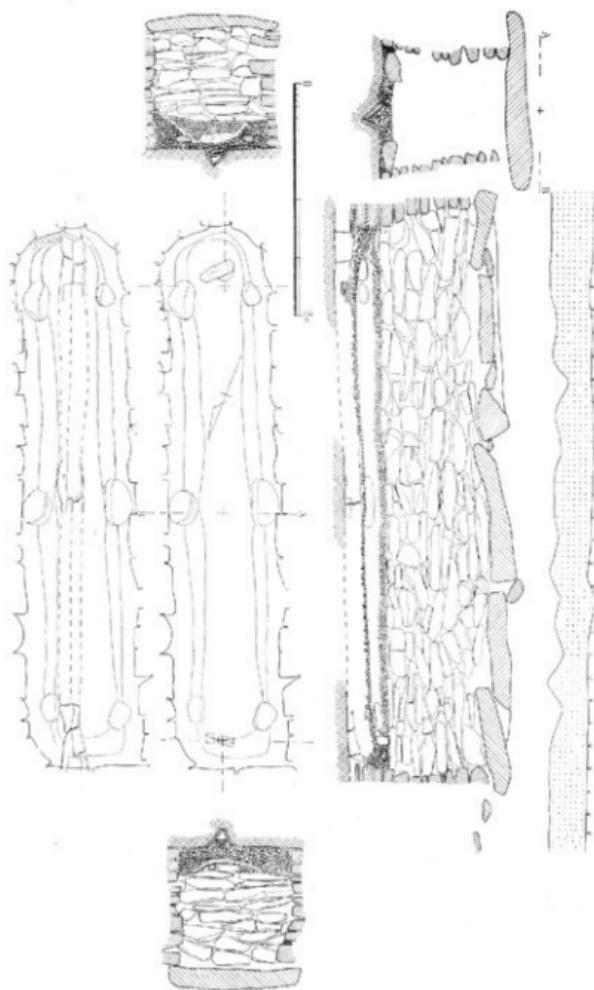
墓 塚 と 石 室 (南から見る)



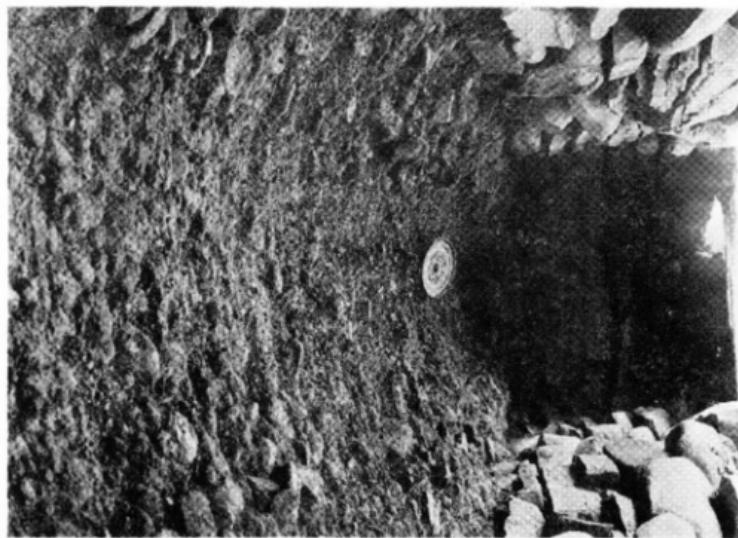
墓 塚 と 石 室（東北部を示す一西から見る）



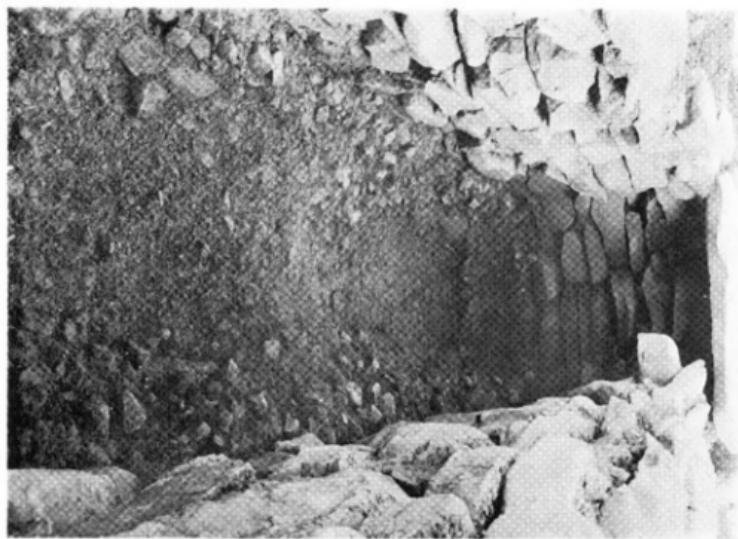
墓 塚 と 石 室（東南部を示す一西から見る）



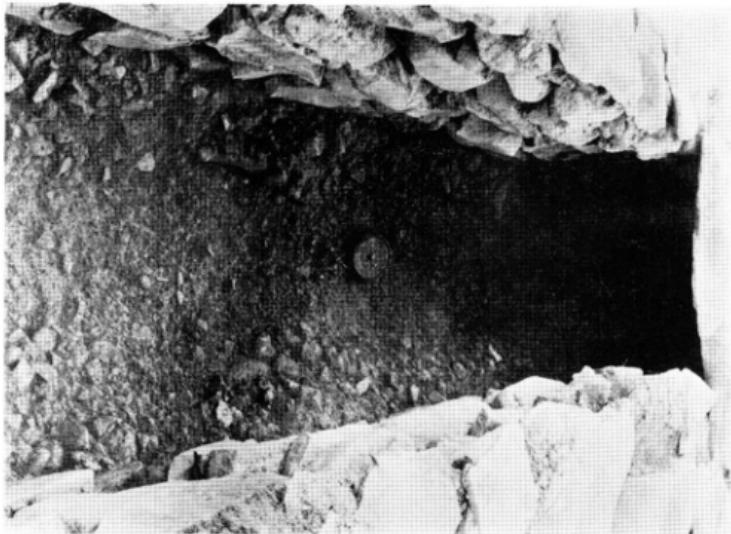
図版第一二  
石室内部の状態



石室内部 (みゆみやま)



石室内部 (みゆみやま)

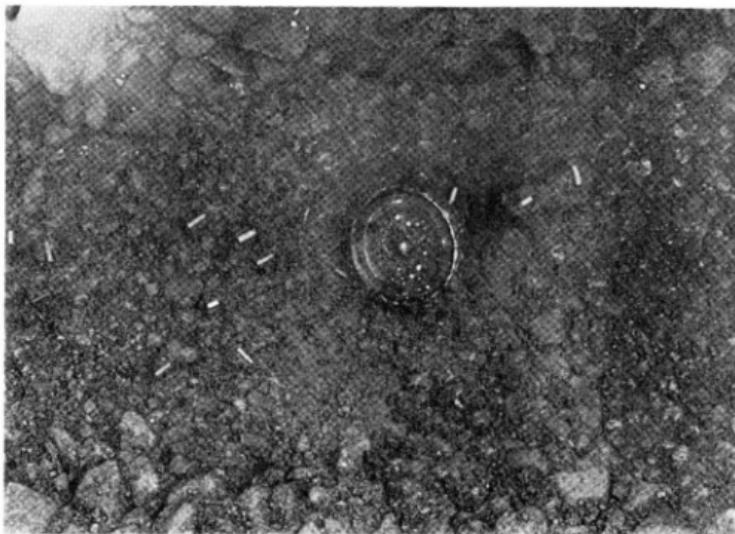


遺物出土状態(内から見る)



遺物出土状態(外から見る)

図版第一四 繰出土状態・石室側壁



鎌山土状態(細部)



石室側壁(西北から見た東南隅の壁)

石室裏床下の排水溝  
(中央部裏床を除いて溝の一部を示す。  
南から見る。)



石室東外側の排水溝  
(手前は溝内の砾を除いて溝の構造を示す。  
南から見る。)



石室外の南の暗渠  
(室内と室外雨側と三本の溝はここで合流  
し左方(南)へ流れる。蓋石を除いて底  
の状態を示す。)



図版第一六 排水構造(1)

南側表面を下る暗渠の蓋石  
(斜面を下った溝が右方第一列石の下へ)  
〔抜ける。〕



南斜面を下る暗渠  
(蓋石を除いて内部を示す)

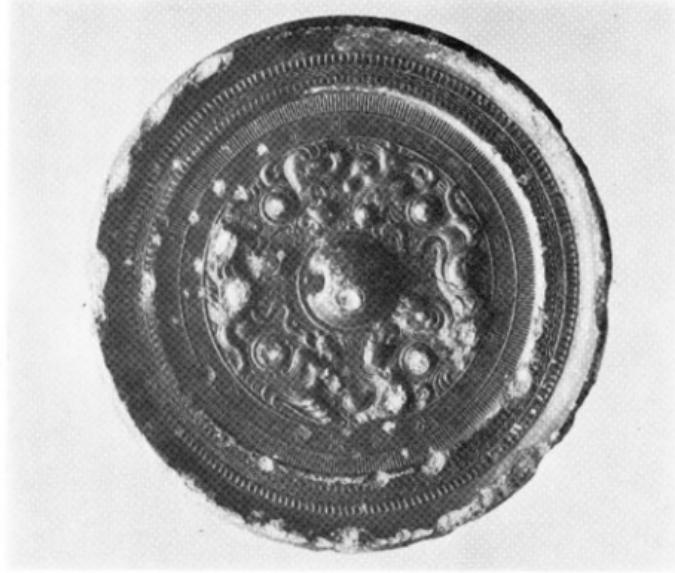
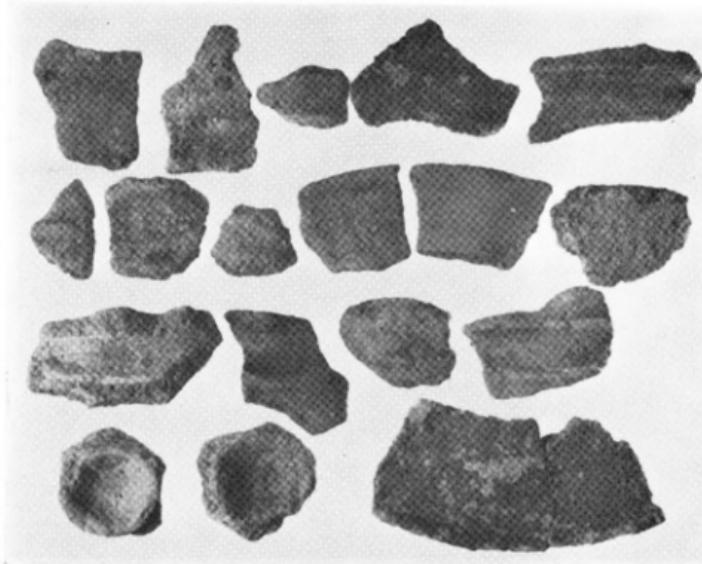


南側第一列石の下を通った暗渠  
(左方は第一列石へと通する。  
〔さらには下方へと通する。〕)



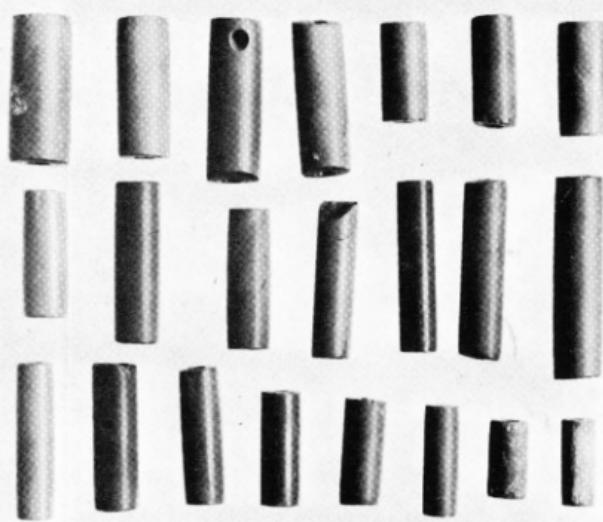
範

土  
師  
器

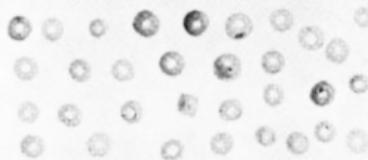


鏡 銘 部

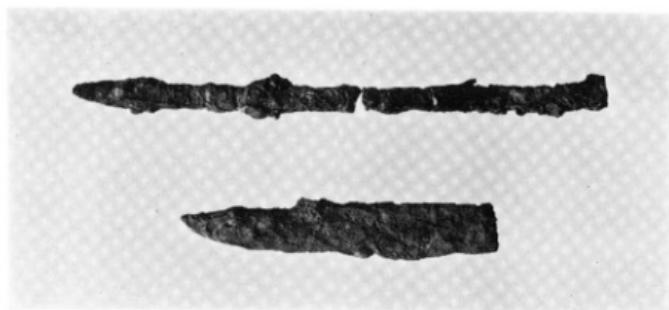




碧玉製管玉（太形）

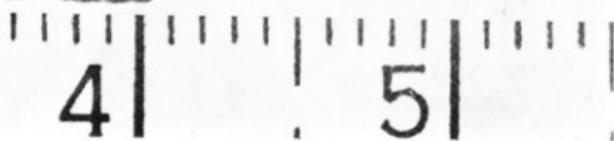
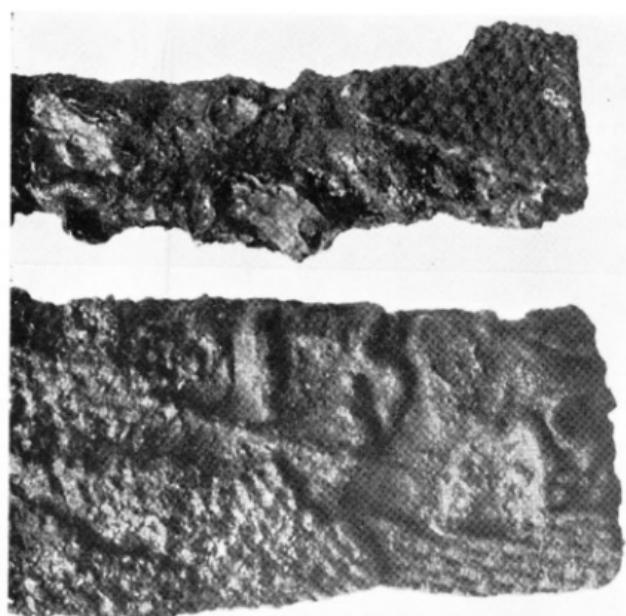


碧玉製管玉（細形）・ガラス製小玉



鉈(E)・刀子(F)

鉈と刀子に附着した機物の細部



図版第二一  
山陰の古式堅穴式石室



造山第一号墳第一石室



鳥取県羽合町橋津馬ノ山第四号墳石室

昭和四十二年三月二十五日印刷  
昭和四十二年三月三十一日発刊

松江市殿町一一番地  
発行所 島根県教育委員会

印刷所 株式会社報光社